加茂市文化財調査報告(4)

牛ヶ沢B遺跡

—新潟県加茂市宮寄上牛ヶ沢B遺跡発掘調査報告書—

1993

新潟県加茂市教育委員会

牛ヶ沢B遺跡

―新潟県加茂市宮寄上牛ヶ沢B遺跡発掘調査報告書―

1993

新潟県加茂市教育委員会

序

加茂市の東南端に聳える霊峰粟ケ岳（標高1,293m）の山麓に17集落が点在し、七谷地区と呼ばれています。この地は当市において遺跡が最も密集している地域の一つであり、今までに数多くの遺物が発見されてきました。本調査報告書の「牛ケ沢Ｂ遺跡」もこの七谷地区に位置します。

平成４年度に牛ケ沢Ｂ遺跡内に東北電力中越幹線の鉄塔が新設されることになり、工事に先立って発掘調査を実施しました。調査の結果は、旧石器時代のものと推定される石刃や縄文時代草創期のものと思われる鋭利な石槍や縄文時代前期と思われる磨製石斧など貴重な資料が多数出土しました。遺跡の性格としては、遺物・遺構から縄文時代前期（約5,000 年前）を中心とした小規模な集落跡ではないかと考えられます。

出土した遺物を通して、……。往時の人びとが石器作りに励みながら明日の狩猟の成果を願い、できあがった石器を手に粟ケ岳の山麓を駆けめぐったことに思いが馳せ感懐を覚えます。この先人の遺した貴重な文化遺産を大切に保存し後世に伝えていきたいものと考えます。

本遺跡の発掘調査にあたり、ご指導・ご支援を賜りました県教育庁文化行政課、並びに七谷地区の皆様方、また作業に献身的に従事されました地元の方々のご苦労に対し、改めて心から感謝申し上げます。

平成５年３月

加茂市教育委員会

教育長　伊　藤　笹　男

例　　言

1. 本書は東北電力（株）の鉄塔建設に伴う新潟県加茂市大字宮寄上字広田2587他に所在する牛ケ沢B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は東北電力（株）と加茂市教育委員会との契約に基づき、加茂市教育委員会が調査主体となって、平成4年5月6日～6月8日に実施した。発掘調査経費は、事業主体である東北電力（株）が負担した。
3. 遺物整理作業は平成4年10月～平成5年2月まで行った。
4. 出土遺物は一括して加茂市教育委員会（加茂市民俗資料館）が保管し、遺物の注記は「牛B」を付し出土地点を記した。
5. 遺構・遺物の実測、写真撮影及び挿図の作成は、整理員の協力を得て伊藤（秀）が行い、報告書の執筆及び編集も併せて伊藤（秀）が行った。
6. 方位は真北を指向する。
7. 第20図の岩野原B遺跡出土石器は、三条商業高等学校社会科クラブ考古班1980『五十嵐川流域における先史遺跡VOL.2』からの転載である。
8. 図版の空中写真は、国際航業（株）発行の1983年撮影のものを使用した。
9. 調査体制は以下の通りである。

調査主体者	伊藤　笹男（加茂市教育委員会教育長）
総　　括	伊藤　武之（社会教育課長）
管　　理	中山　隆夫（社会教育課長補佐）
庶　　務	番場　ヒデ・土田　孝次郎・長谷川　健一（社会教育課）
	桑原　厚三（加茂市民俗資料館）
調査担当	伊藤　秀和（社会教育課主事）
発掘作業参加者	小柳　常次・小柳　章一・小柳　一次郎・小柳　只次・小野　国一
	小柳　マツ・小柳　エツ・中野　一枝・中野　ノブ・安中　ヨシ
	土田　孝次郎
整理作業参加者	相田　優子・長谷川　健一・武田　陽子

10. 発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々から多大な御教示、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

伊藤　景昭・小熊　博史・梶　　良成・金子　正典・川上　貞雄・小池　義人・駒沢　悦郎
駒見　和夫・斎藤　　淳・坂井　秀弥・佐藤　賢二・鈴木　俊成・関　　正平・高橋　　明
竹内　行一・田畑　　弘・田村　浩司・長谷川　昭一・前山　精明・八百枝　茂
亀山測量事務所（有）・新潟県教育庁文化行政課・新潟県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

序
例　言
目　次
挿図目次　図版目次　表目次
Ⅰ　序章 …… 1
　1.調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2
　1. 遺跡の位置 …… 2
　2. 周辺の遺跡 …… 2
Ⅲ　発掘調査の概要 …… 6
　1. 調査区の設定 …… 6
　2. 調査の方法 …… 6
　3. 調査の経過 …… 7
　4. 層　序 …… 8
Ⅳ　遺構 …… 8
　1. 土　坑 …… 8
　2. 小　穴 …… 11
Ⅴ　遺　物 …… 13
　1. 土　器 …… 13
　2. 石器・石器類 …… 19
Ⅵ　まとめ …… 30
　引用・参考文献 …… 32

挿図目次

第1図　牛ケ沢Ｂ遺跡と周辺の遺跡分布図　S＝1／50,000 …… 3
第2図　牛ケ沢Ｂ遺跡周辺の地形図　S＝1／5,000 …… 5
第3図　牛ケ沢Ｂ遺跡グリッド設定図 …… 6
第4図　SK1確認状況図　S＝1／20 …… 8

第 5 図　遺跡の層序……9
第 6 図　遺構配置図　S＝1／125……10
第 7 図　土坑実測図　S＝1／40……12
第 8 図　出土遺物の内訳と土器の構成比……13
第 9 図　遺物平面分布図……15
第10図　土器（1）　S＝1／2……16
第11図　土器（2）　S＝1／2……17
第12図　土器（3）　S＝1／2……18
第13図　石器の器種別構成比……19
第14図　石器（1）　S＝1／2……21
第15図　石器（2）　S＝1／2……22
第16図　石器（3）　S＝1／2……23
第17図　石器（4）　S＝1／2……24
第18図　石器（5）　S＝1／2……25
第19図　石器（6）　S＝2／5……27
第20図　岩野原Ｂ遺跡・山王原遺跡出土石器　S＝1／2……30

写真図版目次

図版 1　遺跡周辺の航空写真（右斜め上が北）
図版 2　1. 遺跡遠景（北西から）　2.遺跡近景（南西から）
図版 3　1. 発掘調査風景　2. 発掘調査風景
図版 4　遺跡の層序（南から）
図版 5　1. 遺物出土状況（西から）　2.遺物出土状況（西から）
図版 6　1. 磨製石斧出土状況（西から）　2. 石槍出土状況（西から）
図版 7　1. SK1 確認状況（西から）　2. SK1 セクション（東から）
　　3. SK1 完掘状況（北から）　4. SK5 確認状況（北西から）
　　5. SK5 セクション（東から）　6. SK5 完掘状況（南から）
図版 8　1. SK2 セクション（南から）　2. SK2 完掘状況（南から）
　　3. SK3 セクション（南から）　4. SK3 完掘状況（南から）
　　5. SK4 セクション（東から）　6. SK4 完掘状況（東から）

図版 9　1. SK6セクション（南から）　2. SK6完掘状況（南から）
3. SK7セクション（西から）　4. SK7完掘状況（西から）
5. SK8セクション（南から）　6. SK8完掘状況（南から）
図版10　1. 遺構完掘状況（南から）　2. 遺跡完掘全景（西から）
図版11　1. 旧石器確認トレンチ1完掘状況（南から）　2. 旧石器確認トレンチ3完掘状況（南から）
3. 旧石器確認トレンチ8完掘状況（南から）　4. 旧石器確認トレンチ10完掘状況（南から）
5. 旧石器確認トレンチ全景（西から）
図版12　1. 第Ⅰ群土器　S＝約1／3　2. 第Ⅱ群土器　S＝約1／3　3. 第Ⅲ群土器　S＝約1／3
図版13　1. 第Ⅳ群土器　S＝約1／3　2. 第Ⅴ群土器　S＝約1／3　3. 第Ⅵ群土器　S＝約1／2
4. 石刃　S＝約1／2
図版14　1. 石槍　S＝約1／2　2. 磨製石斧　ピエス・エスキーユ　擦痕のある剝片　S＝約1／2
図版15　1. 不定形剝片石器A類　S＝約1／2　2. 不定形剝片石器B類　S＝約1／2
図版16　1. 不定形剝片石器C類　S＝約1／2　2. 不定形剝片石器D類　S＝約1／2
図版17　1. 不定形剝片石器E類　S＝約1／2　2. 不定形剝片石器F類　S＝約1／2
図版18　1. 不定形剝片石器G類　S＝約1／2　2. 石核　S＝約1／2
図版19　1. 面付石　S＝約1／4　2. 盤状石（SK1）　S＝約1／3

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表 ……4
第2表　石器観察表 ……28

Ⅰ　序　　章

1. 調査に至る経緯

牛ケ沢Ｂ遺跡が存在する七谷地域は、戦前から遺跡の存在が知られ加茂市内で一番の遺跡密集地である。本遺跡に近接する牛ケ沢Ａ遺跡からは、戦後の山林開放による畑地転換の際に、縄文土器片が出土したと伝えられていた。また、牛ケ沢Ｂ遺跡からも土器片、剥片などが採取され、周知化された遺跡であった。

昭和57年11月に、加茂市教育委員会（以下市教委）は東北電力株式会社（以下東北電力）より、中越幹線新設工事事業計画地内の遺跡の照会を受けた。市教委は計画地内に牛ケ沢Ｂ遺跡が存在するため、新潟県教育庁文化行政課（以下県文化行政課）と協議し、事前の踏査、確認調査が必要な旨、回答した。

平成２年４月、市教委は東北電力から、中越幹線新設工事事業計画について説明を受けた。この計画は、超高圧基幹系統整備長期構想のもと、今後の電力需要の増加に対応するため、越後開閉所と中越変電所（新設）とを連携するための送電線鉄塔工事であり、新潟県を含む東北地方全域にわたって電力の安定供給に大きく貢献するものである。工期着工は平成４年５月、運転開始は平成７年７月の予定が示された。該当地には、牛ケ沢Ｂ遺跡が存在するため、取り扱いが協議されることになった。市教委はその対応について県文化行政課から指導を仰ぎ、平成２年７月24日に川上貞雄氏（日本考古学協会会員）を中心とした現地踏査を行うことを決定した。市教委は、踏査の結果、確認調査の必要があるとの指示を受け、調査員確保の作業にはいった。

平成３年２月28日に、市教委、東北電力、県文化行政課で再度協議を行い、県文化行政課より確認調査が必要な旨指示を受けた。その後も市教委は県文化行政課と協議を重ね、平成３年８月22日～23日において、県文化行政課から職員の派遣を仰ぎ、確認調査を行うことに決定した。確認調査は鉄塔用地、約730m^{2}を対象とし、10カ所試掘坑を設定した。１カ所の試掘坑から不定形剥片石器２点が検出され表面採集にても剥片が数点発見された。明確な遺構は検出されなかったが、剥片が出土している点から縄文時代の小規模集落の可能性が考えられた。この結果から事前の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存が必要となった。

上記の結果により、市教委は東北電力と協議を重ね、発掘調査を行う事で合意した。これを受け東北電力は、平成４年２月13日付けで文化財保護法第57条の２第１項に基づく通知を文化庁長官に行った。その後、発掘調査体制、調査期間、調査費などについて、県文化行政課の指導を仰ぎながら、東北電力と協議を重ねた。そして、平成４年４月13日付けで文化財保護法第98条の２に基づく発掘調査の通知を文化庁長官に行い、平成４年５月６日から６月12日までの約１カ月間の予定で本発掘調査が実施されるはこびとなった。

市教委は地元での作業員確保と発掘用具の購入、運搬、作業員の休憩所の設営などを行い、発掘調査の準備にはいった。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

牛ケ沢Ｂ遺跡は新潟県加茂市大字宮寄上字広田2587他に所在する。加茂市は新潟県のほぼ中央部に位置し、東は村松町、西は三条市、南は下田村、北は田上町に境を接している。新潟県の県庁所在地である新潟市から南に約30km、車で約50分の所にある。市域は東西約17km、南北約8km、面積約13.366km²を測り、東西に細長い形状を呈する。加茂市中央部を、粟ケ岳（1,293m）に源を発する加茂川が北西流し、加茂新田で信濃川に注ぐ。加茂市の地勢は、東部が粟ケ岳、権ノ神岳（1,122m）、白山（1,012m）、堂窪山（1,087m）などがそびえたつ山地、中央部が新津・村松丘陵を構成し、西部が沖積平野である。

現在の加茂市は人口約35,000人を数え、青海神社の境内を含む加茂山公園を中心に市街地が広がる。主要産業は木工業で、桐箪笥は全国シェアの約7割を占める。また、加茂山公園内に群生する「県の木」ユキツバキは、市民の目を楽しませている。

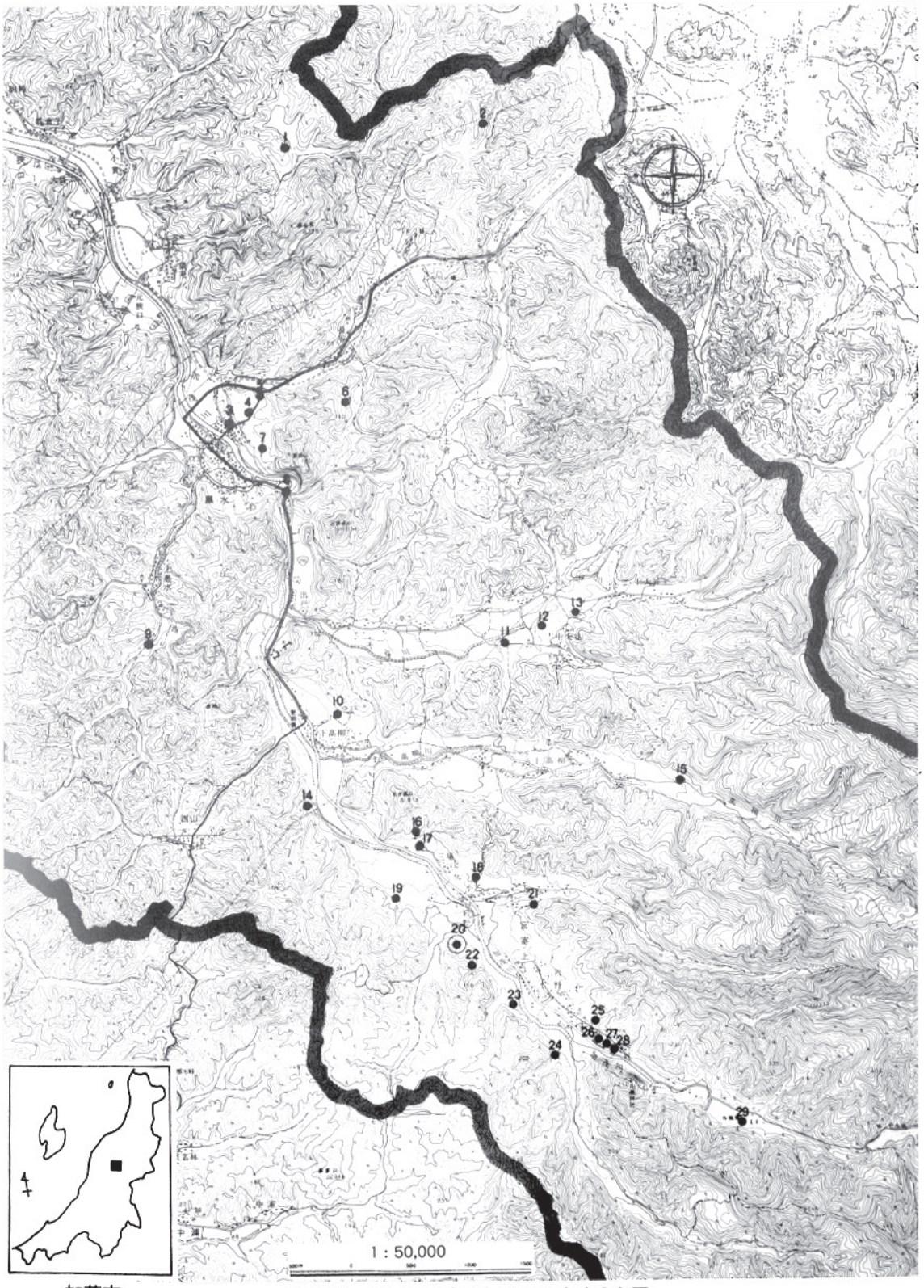
さて、牛ケ沢Ｂ遺跡は加茂市の東部、七谷地区に位置し、市街地から約12kmの距離にある。七谷地区は、昭和29年に加茂市に合併され、面積約81km²を測り加茂市総面積の約60％を占めている。地区の大部分が山林で、加茂川とその支流に沿って集落が営まれている。可耕地は僅か5％にすぎない。また、特別豪雪地域に指定されており、冬期に積雪が3mを超えることも珍しくない。

牛ケ沢Ｂ遺跡は、加茂川左岸の河岸段丘上、標高約120mの平坦地に立地している。眼下に見える興野橋との比高は約20mを測る。東部の山岳地帯から北西部に向かってしだいに標高を下げ、水田部に向かって舌状に突き出た丘陵地帯の先端部近くに位置する。遺跡は約40m×60mの平坦地と緩傾斜地に渡って広がるものと考えられる。遺跡の眼下を加茂川が北西流し、南側の緩傾斜地を下ったところに小さい沢が流れ込んでいる。また、後背地には山林が控え、恵まれた自然環境を呈する。東には粟が岳を仰ぎみることができ、眺望に優れた景勝の地に位置していると言えよう。

2. 周辺の遺跡（第１図・第１表）

加茂市内で行われた発掘調査は、黒水地内に所在する七谷忠魂碑遺跡（8）のみで周辺の遺跡の様相を語るには不明な点が多い。しかし、七谷地区は総合農地開発事業計画に先立って遺跡詳細分布調査が実施されており多くの遺跡が確認されている。ここでは詳細分布調査の結果を参考にして周辺の遺跡（七谷地区）について概観してみたい。

原始時代の遺跡のほとんどすべてが、加茂川を中心に、その支流である小乙川、高柳川、大谷川の両岸の河岸段丘上に立地している。その中でも牛ケ沢Ｂ遺跡が所在する宮寄上地内は、特に遺跡が密集している。



加茂市

第１図　牛ケ沢Ｂ遺跡と周辺の遺跡分布図

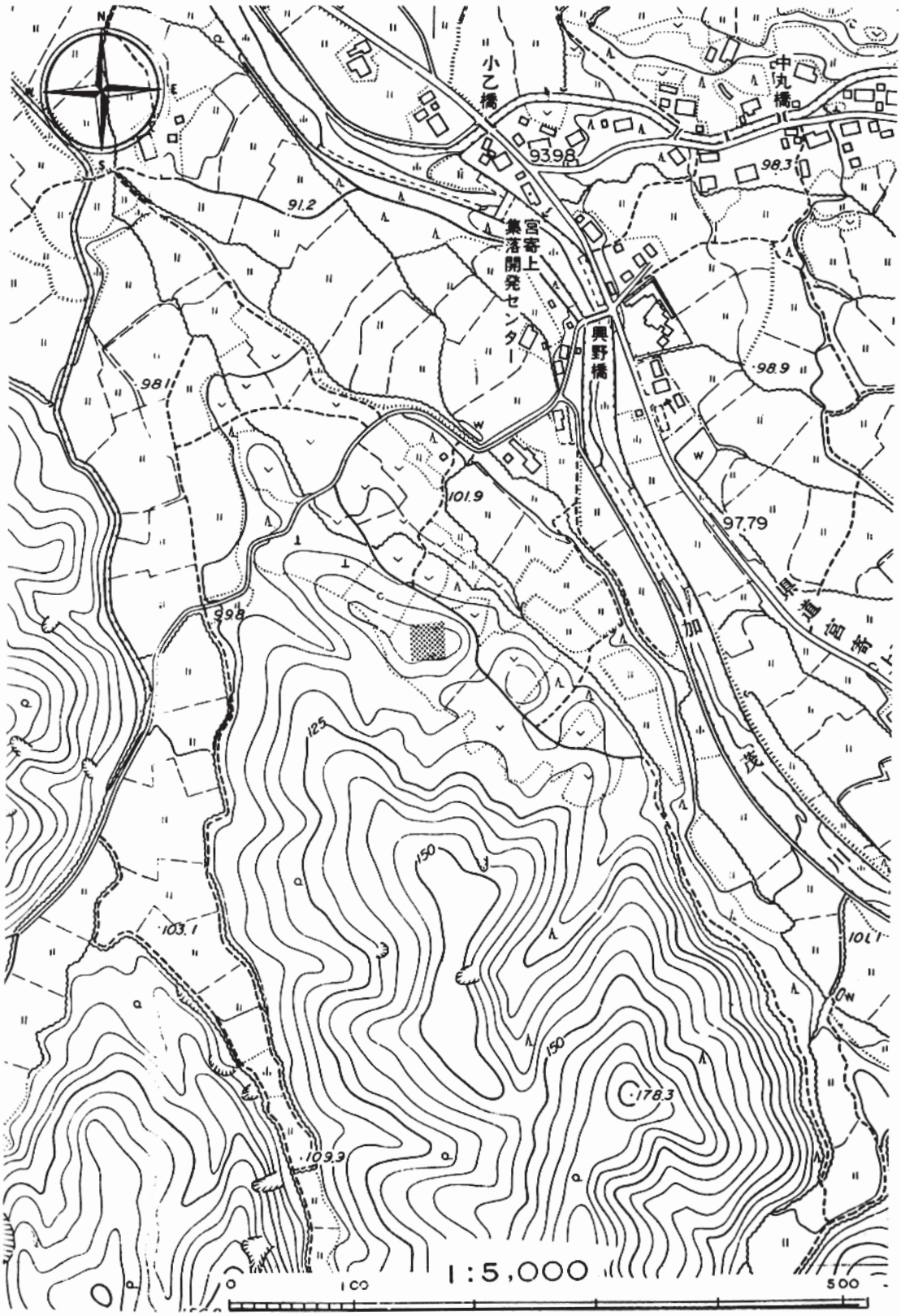
旧石器時代の遺跡としては、牛ケ沢Ｂ遺跡から北西へ約2kmのところに所在する、ナイフ形石器を出土した山王原遺跡（10）がある。この石器は現在長4.9cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmで材質は黒曜石製である（第20図・図版13）。また、三条商業高校社会科クラブ考古班の報告の中に、牛ケ沢Ｂ遺跡から北西へ約4kmの黒水字岩野原に所在する岩野原Ｂ遺跡（7）から、ナイフ形石器一点、石刃三点、削器一点が出土したことが記載されている（第20図）。以上からすれば牛ケ沢Ｂ遺跡は旧石器時代の遺跡として、3遺跡目になる。遺跡数は少ないながら、今後の調査においては、旧石器時代の遺物に十分注意する必要がある。

縄文時代の遺跡は中期～後期が主体であり、草創期、早期は未確認である。牛ケ沢Ｂ遺跡の主体を占める前期の遺跡は、本遺跡から北西へ約6,5kmの狭口猿毛五味沢に所在する猿ケ山遺跡（1）、本遺跡から北へ約5,2kmの下土倉中ノ沢四所在の下土倉遺跡（2）がある。前者は胎土に繊維を多く含むことから前期前半、後者は結節状浮線文の特徴などから前期終末期に位置づけられる。ほとんどの遺跡の年代決定は今後に委ねられているが、中期の遺跡が多く見られ、その他の時期の遺跡は少ない。

縄文晩期以降、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡は定かではなく、中世に至って塚が盛んに築造されるようになる。今後の調査によっては弥生・古墳時代、古代の遺跡が発見される可能性はあろうが、地理的要因、政治的影響に左右された沖積地（加茂市西部地域）への進出が考えられ、分布は希薄な状況を示すであろう。

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺　跡　名	種　別	時期　遺物	番号	遺　跡　名	種　別	時期　遺物
1	猿毛山遺跡	遺物包含地	縄文前期・後期	16	三場Ｂ遺跡	遺物包含地	縄文・剝片
2	下土倉遺跡	〃	縄文前期～中期	17	三場Ｃ遺跡	〃	縄文・剝片
3	岩野原Ｃ遺跡	〃	縄文後期～晩期	18	三場Ａ遺跡	〃	縄文・剝片
4	岩野原Ａ遺跡	〃	縄文中期	19	広田Ａ遺跡	〃	縄文・剝片
5	岩野原Ｄ遺跡	〃	縄文・凹石	20	牛ケ沢Ｂ遺跡	〃	旧石器・縄文前期
6	松ケ沢遺跡	〃	縄文中期	21	諏訪神社前遺跡	〃	縄文・中世
7	岩野原Ｂ遺跡	〃	旧石器・縄文中期	22	牛ケ沢Ａ遺跡	〃	縄文
8	七谷忠魂碑遺跡	祭祀遺跡	縄文中期～後期	23	広田Ｂ遺跡	〃	縄文
9	上黒水遺跡	遺物包含地	縄文・凹石	24	刈干場遺跡	遺物包含地	縄文・磨製石斧
10	山王原遺跡	〃	旧石器	25	岩野新田Ａ遺跡	〃	縄文中期～後期
11	草生津遺跡	〃	縄文・剝片	26	弥次郎遺跡	〃	縄文中期～後期
12	蚊口太遺跡	〃	縄文	27	岩野遺跡	〃	縄文・磨製石斧
13	田中屋敷遺跡	〃	縄文・剝片	28	岩野新田Ｂ遺跡	〃	縄文
14	川向遺跡	〃	縄文後期	29	水源地遺跡	集落址	縄文中期
15	金平遺跡	〃	縄文中期				



第2図　牛ケ沢B遺跡周辺の地形図

Ⅲ　発掘調査の概要

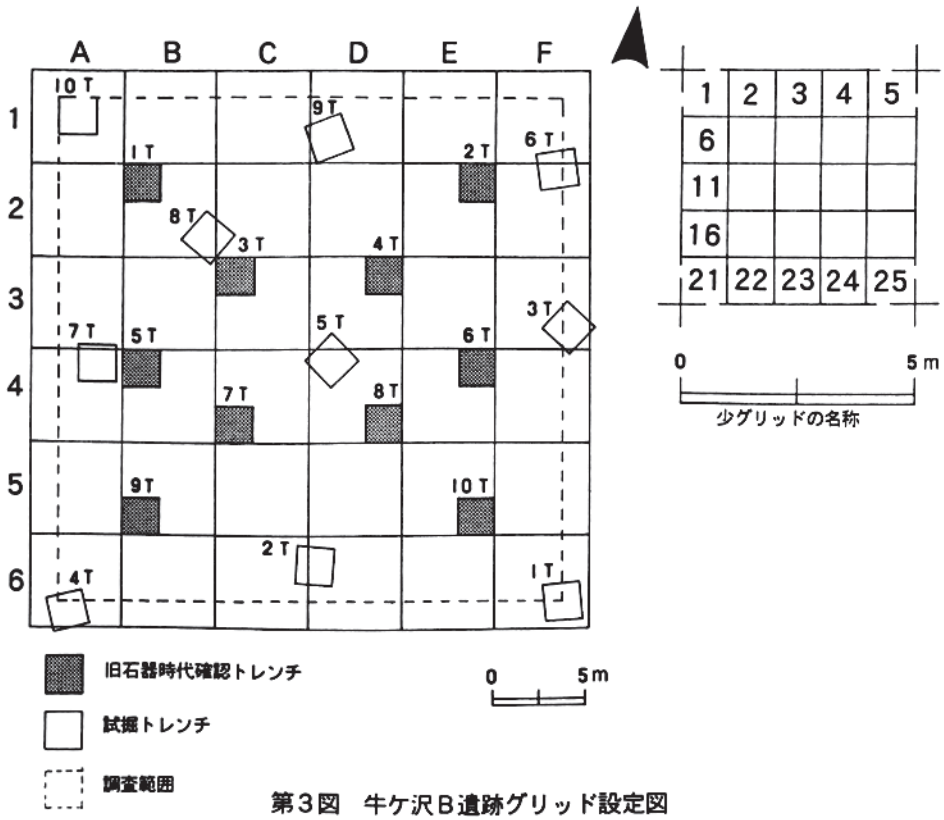
1. 調査区の設定（第３図）

グリッドは、27m四方の鉄塔用地の中心杭と四隅を対角線に結んだ線を基軸とし、5m×5mの大グリッドを設定した。グリッドの呼称は東西をアルファベット、南北を数字とし、5m毎に西から東へA～、北から南へ1～とし両者を組み合わせ「D－5」のようにした。大グリッドはさらに1m方眼ごとに区分し、25等分した。小グリッドは「D－5－10」のごとく呼称した。南北軸は国土地理院の座標系に対し8°20′42″西偏している。

主要グリッド杭や見通し杭の打設、ベンチマーク設定は業者に委託した。

2. 調査の方法

調査区中央の東西グリッドぞいに土層観察のためベルトを設定し、層序を確認しながら東側から西側に向かって掘り進めた。掘削、排土ともに人力で行った。検出された遺構は、通し番号を付し発掘した。また、遺物包含層は存在せず、遺物・遺構も希薄であろうという、確認調査の所見から、可能な限り遺物の出土地点を平板で記録した。出土地点を離れてしまった遺物は、グリッド名を記入したラベルを付し取り上げた。実測は平面図が平板測量で1／20、断面図が1／10、1／20である。



第３図　牛ケ沢Ｂ遺跡グリッド設定図

3. 調査の経過

発掘調査は延べ20日間、延べ人数200人で行われた。調査面積は約729m²である。

5月 6日(水)　小乙集落開発センターにて遺跡の概要、作業内容、注意事項等の説明を行う。

5月 7日(木)　現地にて作業内容の説明の後、発掘作業を開始する。調査区中央の東西グリッドに沿ってセクションベルトを設定し、東側（F－1～F－6グリッド）から耕作土の掘り下げを行う。教育長、社会教育課長視察に訪れ、挨拶を行う。

5月 8日(金)　雨天のため作業中止。

5月11日(月)～ 12日(火)　F－1～F－6グリッドの耕作土掘削ほぼ終了。土器片、剝片が出土しはじめる。

5月13日(水)　E－1～E－6グリッドの耕作土掘削。耕作土の堆積が厚くてまどる。

5月14日(木)　雨天のため作業中止。民俗資料館にて遺物の洗浄を行う。

5月15日(金)～ 16日(土)　D－1～D－6グリッドの耕作土掘削終了。C－4グリッドにて磨製石斧出土する。16日加茂市文化財調査審議委員関　正平氏来跡。

5月18日(月)～ 20日(水)　調査区全域の耕作土掘削終了。

5月21日(木)　調査区東側から遺構確認を開始する。遺物の取り上げを同時に進め、眼高を119.000mに設定し以後同一にする。

5月22日(金)～ 27日(水)　調査区全域にわたって遺構確認を行う。土坑、小穴、溝状遺構を確認する。B－5グリッドにおいて石槍出土する。

5月28日(木)　遺構の半截開始。前日までに確認された溝状遺構が芋畝と判断され、時間の制約もあり調査対象外とする。

5月29日(金)～6月1日(月)　遺構断面の写真撮影と実測を行い終了しだい完掘する。セクションベルトの実測を並行する。

6月 2日(火)　セクションベルトの除去と遺構の平面実測、レベリングを行う。

6月 3日(水)　調査区完掘写真撮影のため、調査区内の清掃と環境整備を行う。

6月 4日(木)　調査区完掘写真撮影、調査区内レベリング終了する。また、旧石器時代の遺構・遺物確認のため、2m×2mの試掘坑を10ケ所設定し約30cm掘り下げる。

6月 5日(金)　旧石器確認調査終了するも、遺構・遺物は見られなかった。

6月 6日(土)　器材を洗い、現場事務所内の整理を行う。

6月 8日(月)　器材撤収し、全工程終了。

本発掘調査にあたっては、当初の計画どおり完了することができた。これは、調査に参加して下さった地元の方々や関係者の方々のご理解とご協力のおかげである。これらの方々に心から感謝申し上げます。

4. 層序（第５図・図版４）

調査範囲の現況は畑地であり、耕作による攪乱がところどころに見られる。明確な遺物包含層は存在しない。また、調査区は南と北に向かって緩く傾斜し、中央部が平坦になっている。基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　暗褐色土　耕作土。厚さ 15～40cm。色調の違いにより３種に区別される。

第Ⅱ層　暗褐色土と黄褐色土の混合　地山漸移層。厚さ 5～20cm。

第Ⅲ層　黄褐色ローム層　地山層。

第Ⅰ層においても遺物が多く認められるが、後世の攪乱の影響を受けた可能性が高く、本来の遺物包含層は第Ⅱ層にあったと考えられる。

Ⅳ　遺　　構

牛ケ沢Ｂ遺跡で確認された遺構は、土坑８基、小穴12基を数えるにすぎない。遺構は希薄ながら調査区南半部に集中する。しかし、SK8以外には遺物の出土はなく、明確に時期を特定できない。以下、土坑＝SK として記す。

1. 土坑（第４、７図・図版７～９）

SK1（第４図・第６図・図版７）

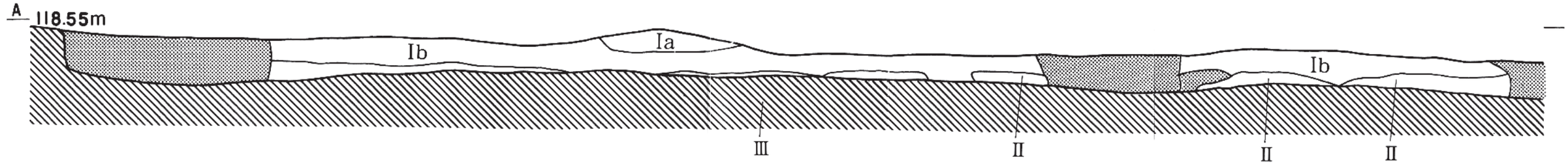
調査区北西端に近いＣ－１グリッドに位置する。主軸をほぼ東西方向に向けている。平面形は、やや隅丸の不整長方形である。長軸 135cm、短軸 83cm、確認面からの深さ 22cm を測る。底部は平坦で、壁はほぼ直線的に立ち上がる。覆土は上から黒褐色土、暗黄褐色土の２層に分かれる。

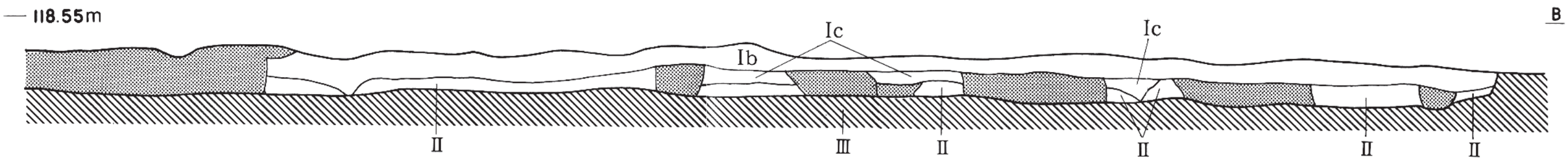
土坑の上部ほぼ中央に、長さ 36cm、幅 30cm、厚さ 3cm の盤状の石が確認された。石材は流紋岩である。他の遺構と離れ単独で存在することや盤状石の存在から墓坑の可能性が考えられる。しかし、遺物、骨片は確認できなかった。

SK2（第７図・図版８）

Ｂ－５グリッドに位置し、主軸をほぼ南北に向けている。平面形は楕円形で、長軸 105cm、短軸 74cm、確認面からの深さ 24cm を測る。底部は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。覆土は３層に分かれ、暗褐色土を基調にレンズ状に堆積している。遺物は出土しなかった。

第４図 SK1 確認状況図（S = 1／20）





Ⅰ層　暗褐色土（耕作土）色調の違いでIa、Ib、Icに分かれる

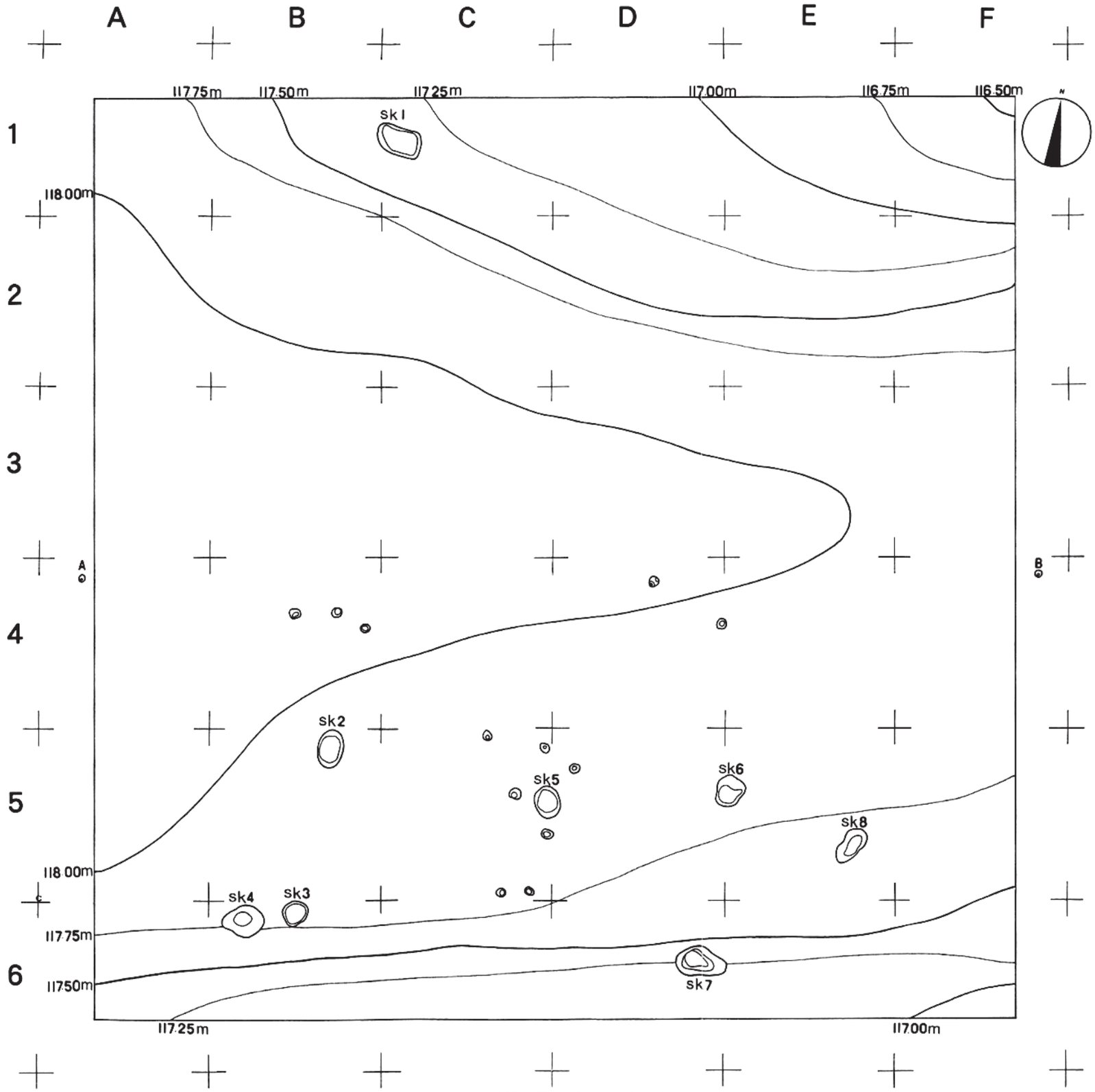
Ⅱ層　暗褐色土と黄褐色土の混合層（地山漸移層）

Ⅲ層　黄褐色ローム（地山）

撹乱

0　2m

第5図　遺跡の層序



第6図　遺構配置図（S＝1／125）

0　5m

SK3（第７図・図版８）

Ｂ－６グリッドに位置し、ほぼ円形を呈する。長軸72cm、短軸63cm、確認面からの深さ12cmを測る。底部は平坦で、壁はやや緩く立ち上がる。確認面で土坑周縁に焼土が見られ、火を使用した痕跡と考えられる。覆土はほぼ水平に堆積し２層に分かれる。上層に炭化物が多く含まれる。遺物は出土しなかった。

SK4（第７図・図版８）

SK3と同様にＢ－６グリッドに位置し、楕円形を呈する。長軸117cm、短軸85cm、確認面からの深さ28cmを測る。南側に段を有し、北壁で直線的に立ち上がる。覆土は暗茶色土を基調に４層に識別できる。遺物は出土しなかった。

SK5（第７図・図版７）

Ｃ－５、Ｄ－５グリッドにかけて位置し、ほぼ円形を呈する。径約85cm、確認面からの深さ12cmを測る。底部は平坦で、壁はほぼ直線的に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、３層に識別できる。遺物は出土しなかった。

SK6（第７図・図版９）

Ｄ－５、Ｅ－５グリッドにかけて位置し、不整円形を呈する。長軸87cm、短軸80cm、確認面からの深さ19cmを測る。断面は緩いＵ字状を呈する。覆土は根攪乱を受けているが、４層に識別できる。遺物は出土しなかった。

SK7（第７図・図版９）

Ｄ－６グリッドに位置し、主軸を東西方向に向ける。平面形は楕円形で、長軸145cm、短軸87cm、確認面からの深さ30cmを測る。南側に段を有し、北壁でほぼ直線的に立ち上がる。覆土は２層に識別でき、上層が暗茶色土、下層が暗黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK8（第７図・図版９）

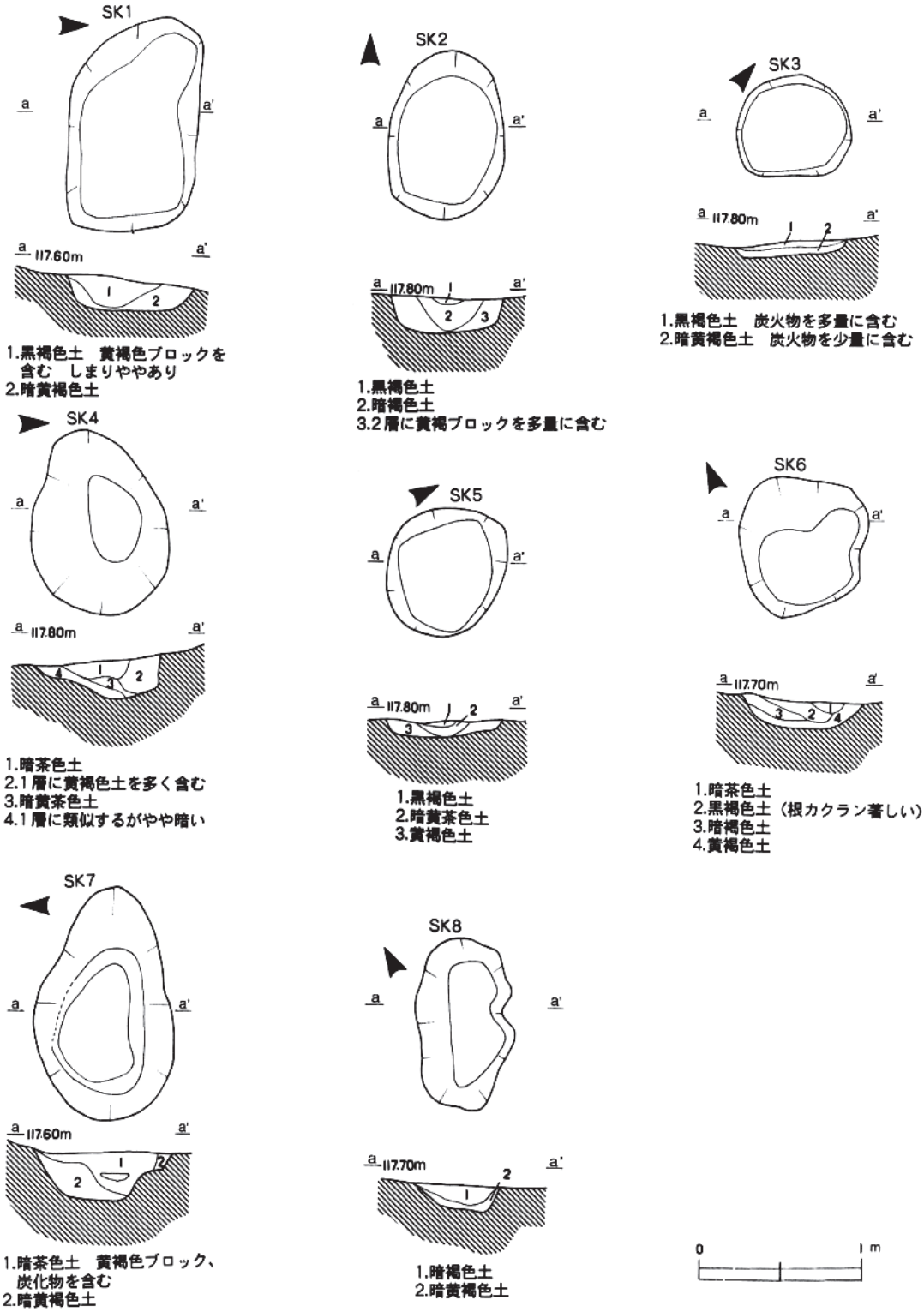
Ｅ－５グリッドに位置し、不整長方形を呈する。長軸105cm、短軸63cm、確認面からの深さ17cmを測る。底部は平坦で、壁はほぼ直線的に立ち上がる。覆土は２層に識別でき、上層が暗褐色土、下層が暗黄褐色土である。遺物は上層から縄文時代後期の土器片数点が出土した。

2. 小　穴

小穴は全部で12基検出された。いずれも、ほぼ垂直に掘り込まれ、直径25～37cm、確認面からの深さ22～38cmを測る。黄褐色ブロックを混入した暗褐色土を覆土とする。

小穴の分布は、Ｃ－５グリッドにおいて密である。企画性を持って並び、何らかの施設を想定させるものはなかったが、居住施設に関係したものであったことも否定できない。

遺物は出土せず、時期は不明である。



第７図　土坑実測図（S＝1／40）

V　遺　　物

牛ケ沢B遺跡の出土遺物の内訳は、土器213点、石器41点、石核5点、剥片類150点、これ以外に搬入石材と考えられる自然礫類216点（うち焼礫23点）が出土している。ただし、土器は小破片もすべて一点と数えており、個体数はもっと低い数字になる。

遺物の出土分布図からE－6、F－6グリッドにかけてややまとまって出土し、A－1、B－1、2グリッドにおいては希薄な様子が窺えるが、調査区南半部を中心にまんべんなく出土している。調査区は畑地として利用されており、攪乱もみられることから当時の土地利用状況を語るにはいささか不十分である。しかし、E－3グリッドとF－3グリッドにおいて石核、焼礫、石器が同一地点から出土していること、緩斜面部にも遺物が広がっていることは注意を要するであろう。

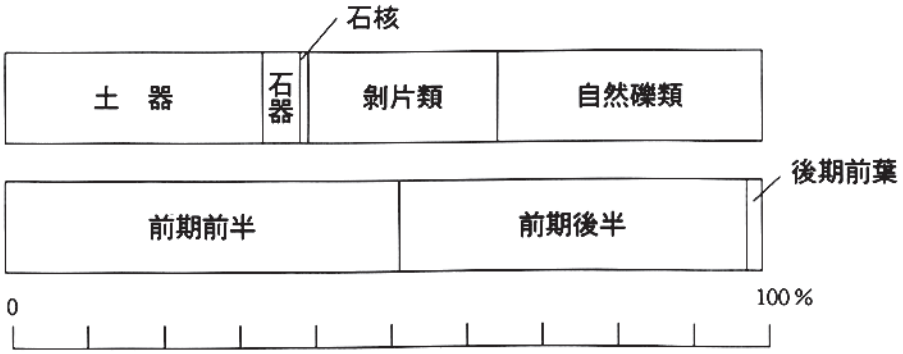
また、遺構に伴った遺物はSK8から出土した縄文時代後期前葉の土器5点のみで、他は全て遺構外の出土である。

以下、種別ごとに記載する。

1. 土器（第10～12図・図版12、13）

出土遺物の割合は第8図のとおりであり、土器は約3割を占めている。しかし、先にも記したように細片が多く、個体数は極めて少ない。割合は1割以下になるものと考えられる。所属時期は、SK8から出土した縄文時代後期前葉の土器5点をのぞいて、他は全て縄文時代前期に属すると思われる。時期が明確でないものも含め、胎土内の植物繊維の混入を指標にして分類すると、前期前半期がやや多くなるが、前期後半期とほとんど同じ割合である。また、以下に述べる群別の割合では、第III群と第IV群の占める割合が小さくなっているようである。

ほとんどが破片資料のため器形は明らかではないが、文様を中心として分類し、時期別にI～VI群に大別し、記載する。分類は、巻町史研究III、IV（小野・小熊1987、小野・前山ほか1988）を参考にした。



第8図　出土遺物の内訳と土器の構成比

第Ⅰ群土器（第10図1～7・図版12）

1、2は器面に撚糸側面圧痕文を施す土器で、蕨手状のモチーフが見られる。1は、口縁部片で、口唇部は内ソギ状の断面三角形を呈する。L撚りの撚り圧痕を横位に施した後、左下がりと右下がりの刺突を加える。焼成は良好で、胎土に繊維、金雲母、長石・石英類を多量に含む。色調は、外面が暗茶色、内面が暗赤褐色を呈する。2も蕨手状のモチーフが見られ、胎土、色調とも1に類似するところから、同一個体と思われる。

3～6は、0段多縄の非結束羽状縄文を施す土器である。条幅が約3～5mmと広い。3と4は胎土、色調、条幅等から同一個体であろう。3は外面に炭化物が付着している。3と6はやや微弱であるが、胎土に繊維、金雲母、長石・石英類を含む。5は赤褐色を呈し、内面に炭化物が付着している。焼成は不良で、特に長石・石英類を多く含む。

7は、B－3－3グリッドからまとまって出土した、胴部から底部にかけての深鉢形土器である。器壁厚は最大で約1.6cmを測る。底部は平底で胴部はやや内湾しながら立ち上がり、上位に段を有す。底部近くまでRLの単節斜縄文を施すようである。色調は明黄褐色を呈し、胎土に繊維を多く含む。外面、内面ともに炭化物の付着が見られる。

以上、本群は胎土、文様等から前期前半古段階の花積下層式に対比できると思われる。

第Ⅱ群土器（第11図8～15・図版12）

8、9は結節回転文が横位に施される。9は結節の程度が強い。8は胎土に繊維、砂粒を多く含むが、9は微弱である。色調は明褐色を呈す。この2点は、布目遺跡出土第Ⅲ群土器に対比される。

10～12は不整ループ文が施文されるもので、一施文幅は約1cmと狭い。いずれも胎土に、繊維、金雲母、長石・石英類を多く含む。色調は明褐色を呈す。11の内面に炭化物の付着が見られる。

13は結束羽状縄文を施す土器である。一施文幅が狭く、結束部を強調して施文している。暗褐色を呈し、胎土に繊維を若干含む。布目遺跡出土第Ⅰ群第1類a種土器に対比される。

14は付加条（RLにLを右まきに付加）である。明褐色を呈し、胎土に繊維を若干含む。布目遺跡出土第Ⅳ群第5類土器に対比される。

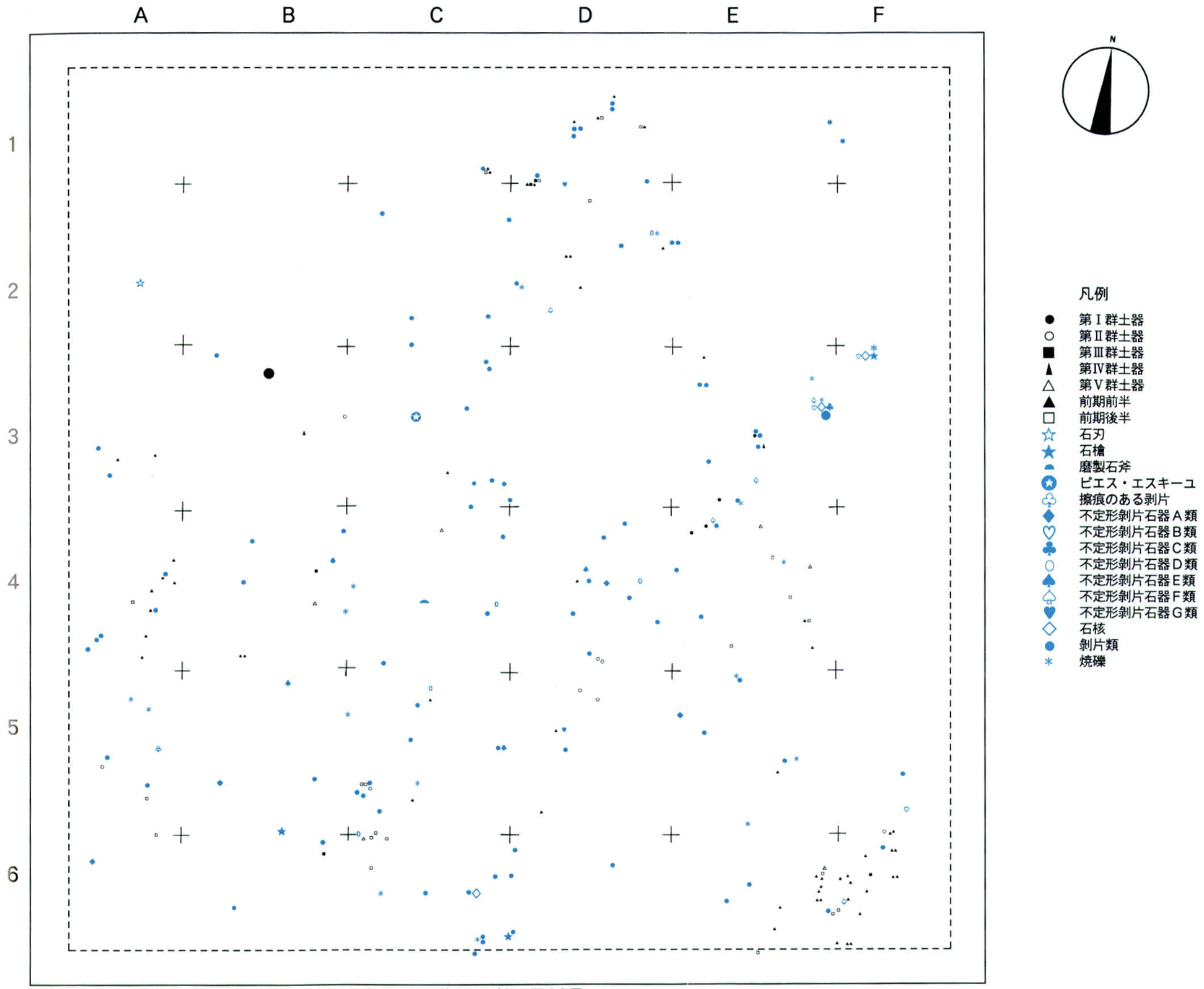
15は平底形態の底部資料であり、胴部は外反して立ち上がる。胴下半部から底面にかけて爪形刺突列が放射状に施文され、胴上半部には単節斜縄文（RL）が施されるようである。褐色を呈し、胎土に繊維、金雲母、長石・石英類を多量に含んでいる。巻町新谷遺跡、柏崎市大湊遺跡に類例がある。

以上、本群は文様の特徴等から前期前半中段階の二ッ木～関山式に対比できると思われる。

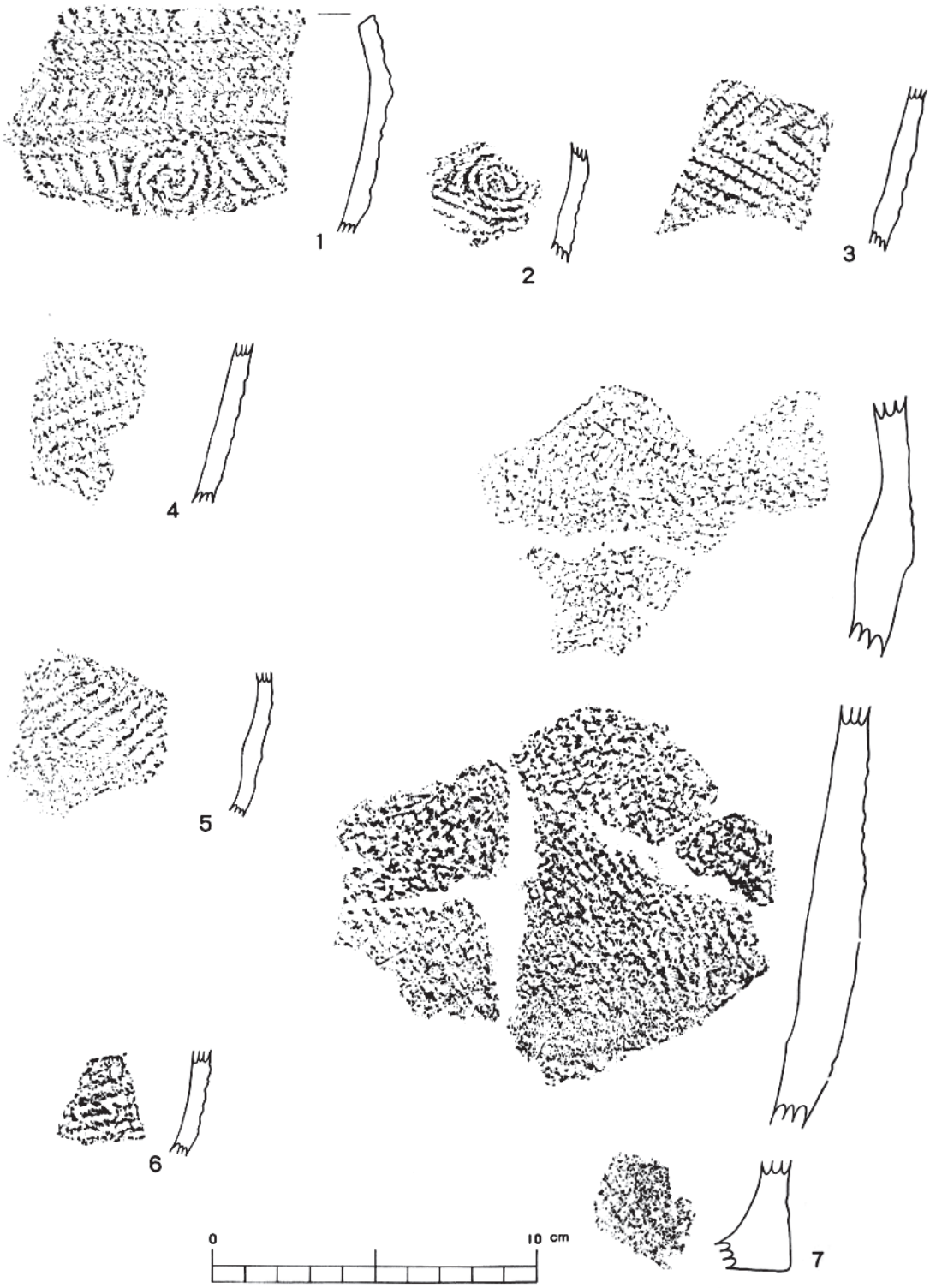
第Ⅲ群土器（第11図16～18・図版12）

16はコンパス文風の沈線が見られる。褐色を呈し、胎土に繊維、長石・石英類を若干含む。

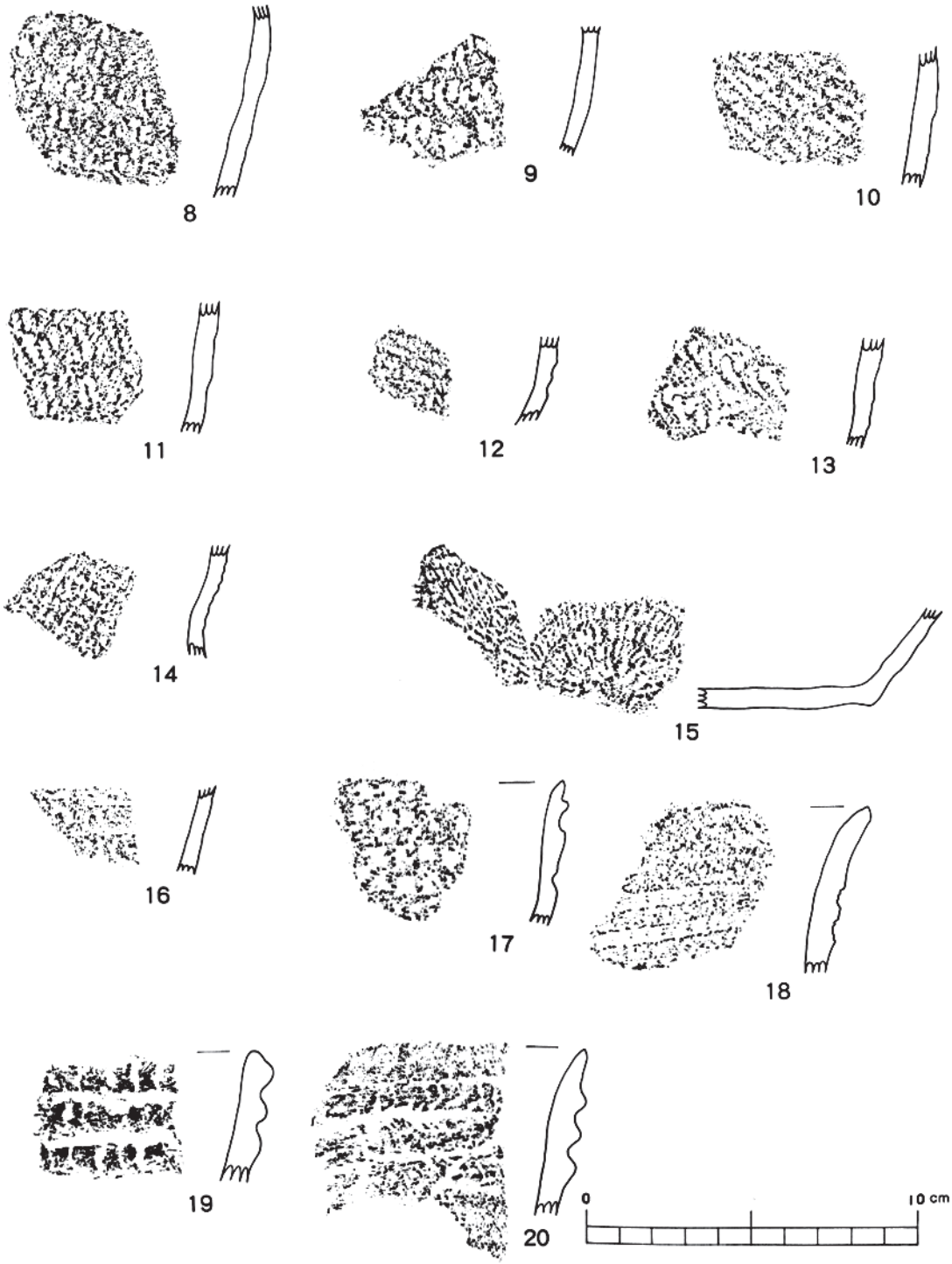
17は直立、18はやや外反する口縁部片である。17は幅約5mmの角棒状工具で刺突が連続的に施


A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
5
6
N
凡例
第Ⅰ群土器
第Ⅱ群土器
第Ⅲ群土器
第Ⅳ群土器
第Ⅴ群土器
前期前半
前期後半
石刃
石槍
磨製石斧
ピエス・エスキーユ
擦痕のある剥片
不定形剥片石器Ａ類
不定形剥片石器Ｂ類
不定形剥片石器Ｃ類
不定形剥片石器Ｄ類
不定形剥片石器Ｅ類
不定形剥片石器Ｆ類
不定形剥片石器Ｇ類
石核
剥片類
焼礫

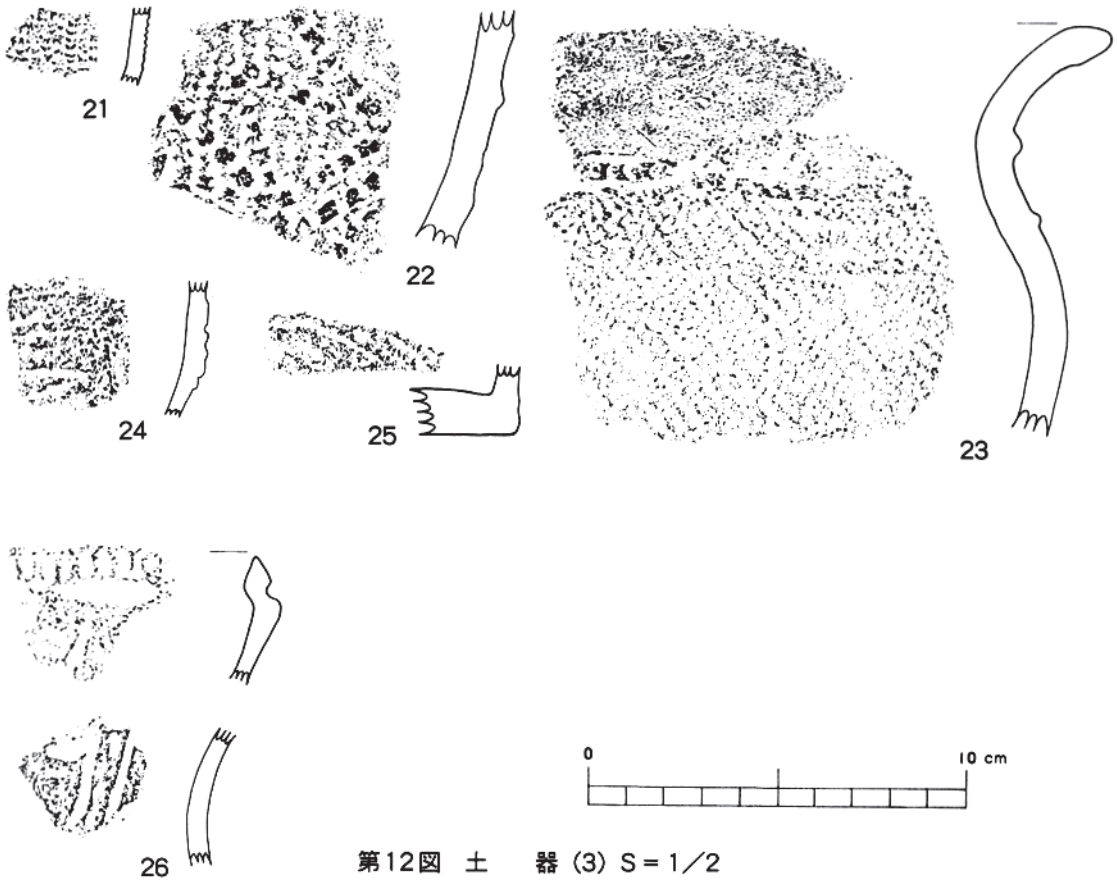
第９図　遺物平面分布図



第10図　土　　器（1）　S＝1／2



第11図　土　　器 (2)　S＝1／2



第12図　土　　器（3）S＝1／2

される。明褐色を呈し、胎土にわずかの繊維と多くの長石・石英類を含む。18は斜行縄文地に、頸部付近に多截竹管工具による二列の押し引き文が施される。暗褐色を呈し、胎土に長石・石英類を含む。繊維の混入は微量である。豊原遺跡出土第Ⅰ群第５類土器に対比されよう。

以上、本群は文様、繊維の混入量等から前期前半新段階の黒浜式に対比できると思われる。

第Ⅳ群土器（第11図19、20・図版13）

19、20とも直立ぎみに立ち上がる口縁部片で、幅5～7mmの浮線文を施し、ヘラ状工具による刻み目を矢羽根状に加えている。20は、刻み目が密にほどこされ、口唇部にも刻み目を加える。地文は斜行縄文である。19は暗褐色、20は明黄褐色を呈し、胎土に繊維の混入は認められない。

以上、本群は文様等から前期後半諸磯ｂ式中段階に対比できると思われる。

第Ⅴ群土器（第12図21～24・図版13）

21～23は結節状浮線文を施すグループである。21は小破片であるが、2mm幅の粘土紐を4mm間隔に貼付し、半截竹管工具で刺突が密に施される。刻み目の回数は1cmで5回を数える。器壁厚は約5mmと薄い。焼成は不良である。22は胴部片で、縄文地に4mm幅の粘土紐を斜位（？）に貼付し、刺突が約4～5mm間隔で施される。器壁厚は約1cmと厚い。明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に長石・石英類を多く含む。23は口縁～胴部上半部にかけての土器片で、ややふくらんだ

胴部に外反する口縁がつく。斜行縄文地（RL）に口縁に平行した二条の結節状浮線文を施す。粘土紐の幅は3mmである。外面暗褐色、内面明褐色を呈し、胎土に長石・石英類を多く含む。器壁厚は約9mmである。

24は半截竹管工具で沈線が施文される。小破片であるため、モチーフは不明である。焼成は不良で明褐色を呈す。

以上、本群は文様等から豊原遺跡出土第Ⅳ群土器に対比でき、前期終末段階の十三菩提式期に位置づけられよう。

その他（第12図25・図版13）

底部資料である。やや上げ底気味の平底で、底部近くまで斜行縄文が施される。内面と断面の一部が二次焼成を受けている。

第Ⅵ群土器（第12図26・図版13）

26は深鉢形土器で、逆「く」の字状をした口縁部～下ぶくれ気味の胴部片である。口頸部に幅太の沈線（約5mm）を巡らし文様帯を区画する。上部に刻み目、下部に沈線を垂下させ、胴部にも沈線を垂下させる。明褐色を呈し、胎土に長石・石英類を多く含む。SK8からの出土である。

以上、本群は文様等から後期前葉の南三十稲場式期に位置づけられる。

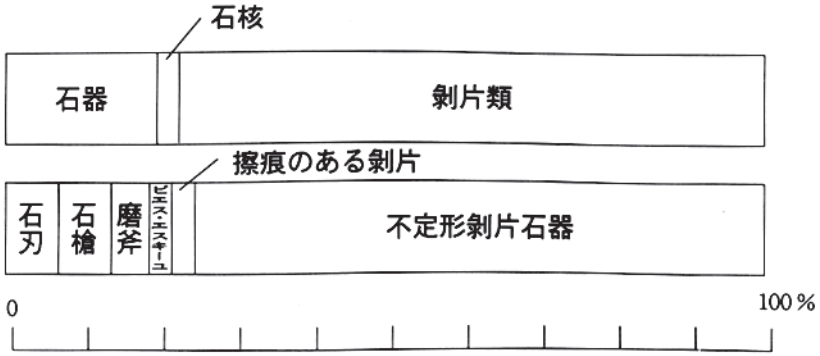
2. 石器・石器類（第14図～19図・第2表・図版13～19）

出土した石器の内訳は、石刃3点、石槍3点、磨製石斧2点、ピエス・エスキーユ1点、擦痕のある剥片1点、不定形剥片石器31点で計41点である。その他に、石核5点、剥片類150点が出土している。分布図からは顕著な偏りは見られない。

石器の組成では、第13図のごとく不定形剥片石器がとびぬけて多い。また、石材は頁岩系が9割を占め、剥片類も同様のあり方である。

時期は石刃が旧石器時代に、石槍が旧石器時代末～縄文時代草創期に位置づけられる他は、出土土器から判断して縄文時代前期に所属すると思われる。

以下、器種毎に記述する。



第13図　石器の器種別構成比

石刃（第14図1～3・図版13）

3点出土しており、いずれも縄文時代の遺物と混在して出土している。素材はすべて縦長で1、3が珪質頁岩、2が硬質頁岩製である。1は両側縁に、2は左側縁の一部に、3は右側縁に使用の結果と思われる微細な刃こぼれが認められる。また、2は左側縁に小剥離が連続するが、風化の状態から後世の欠損と思われる。1、3は一部に自然面を残す。いずれも単設打面の石核から剥離されたものと推定される。

石刃が出土したことから、任意にトレンチ（2m×2m）を10ケ所設定し、ローム質土の調査を行ったが、遺物の出土はなかった。（第3図・図版11）

石槍（第14図4～6・図版14）

3点出土している。4は基部を欠損するが、現在長12.6cm、厚さ0.6cmを測る大形、薄手の柳葉形の石槍である。身部の両側縁はゆるく湾曲し、鋭利な先端を持つ。両側縁は非対称で、最大幅を身部の中央部に持つ。器面加工は比較的ラフな両面調整が施される。石材は頁岩である。5、6は最大幅を基部に持つ肉厚、中形の石槍で、ともに両面調整が施される。5は6に比べ幅狭で、基部に抉りが入る。調整はラフである。頁岩製。6は円基を呈する。風化のため剥離の輪郭が不明瞭である。安山岩製。

以上、三者三様の形態を持つが、4は神子柴型、5、6は横倉型に属すると思われる。白石編年（白石1989）の第4期に相当し、旧石器時代末～縄文時代草創期に位置づけられるであろう。

磨製石斧（第14図7、8・図版14）

2点出土しており、1点は表採資料である。いずれも欠損品であるが、断面形が隅丸長方形を呈する、いわゆる定角式磨製石斧であろう。7は円刃で、正裏面、側面に稜を持ち、研磨痕をとどめる。8は中央部以下を欠損する。表面はざらついている。石材は、いずれも石英粗面岩である。

ピエス・エスキーユ（第14図9・図版14）

上下に刃部を有し、両極剥離痕をとどめる。凝灰岩製で、1点のみの出土である。

擦痕のある剥片（第14図10・図版14）

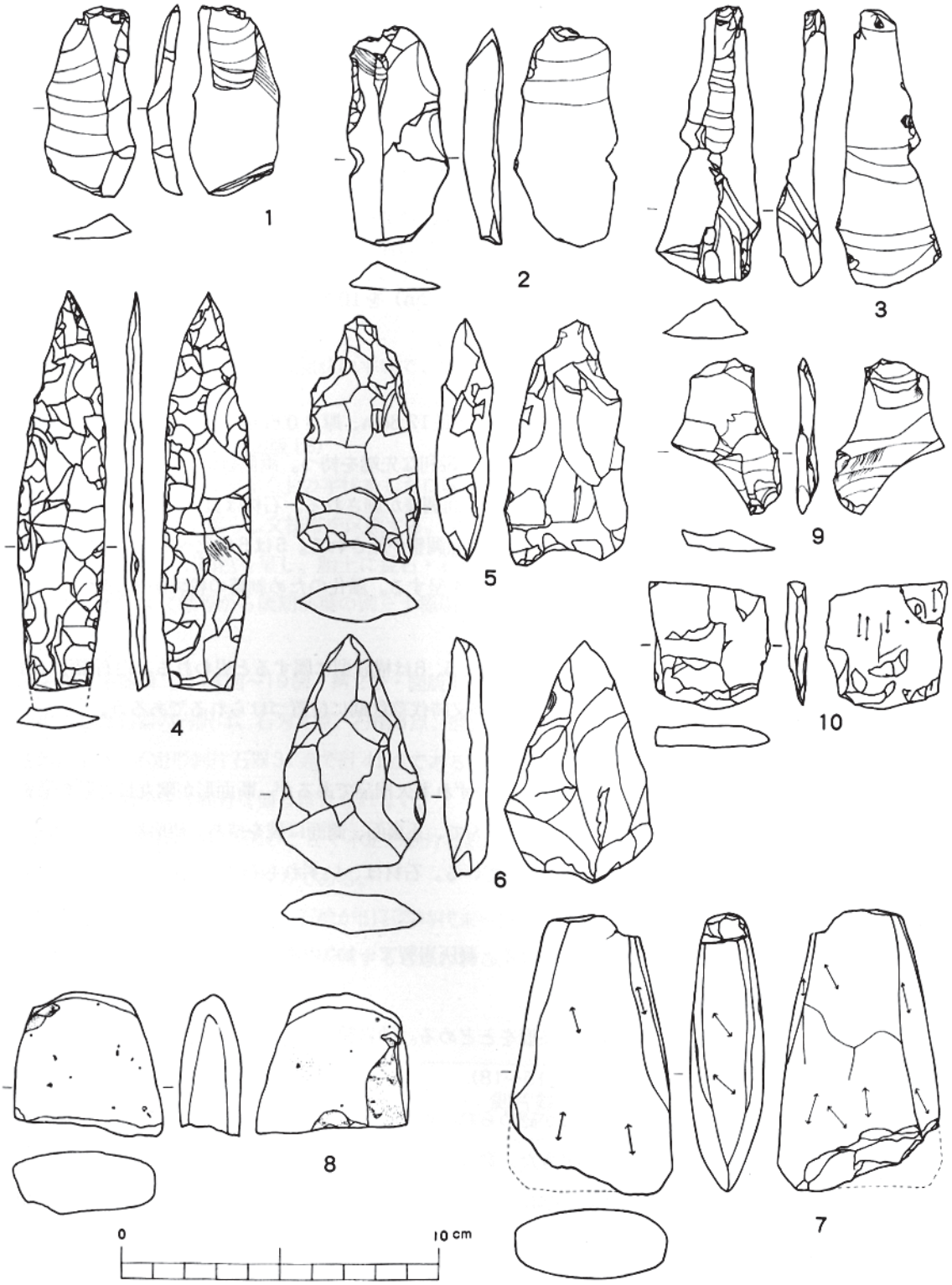
板状の剥片で、裏面に上下方向の線条痕をとどめる。砂岩製で、1点のみの出土である。

不定形剥片石器（第15図～19図・図版15～18）

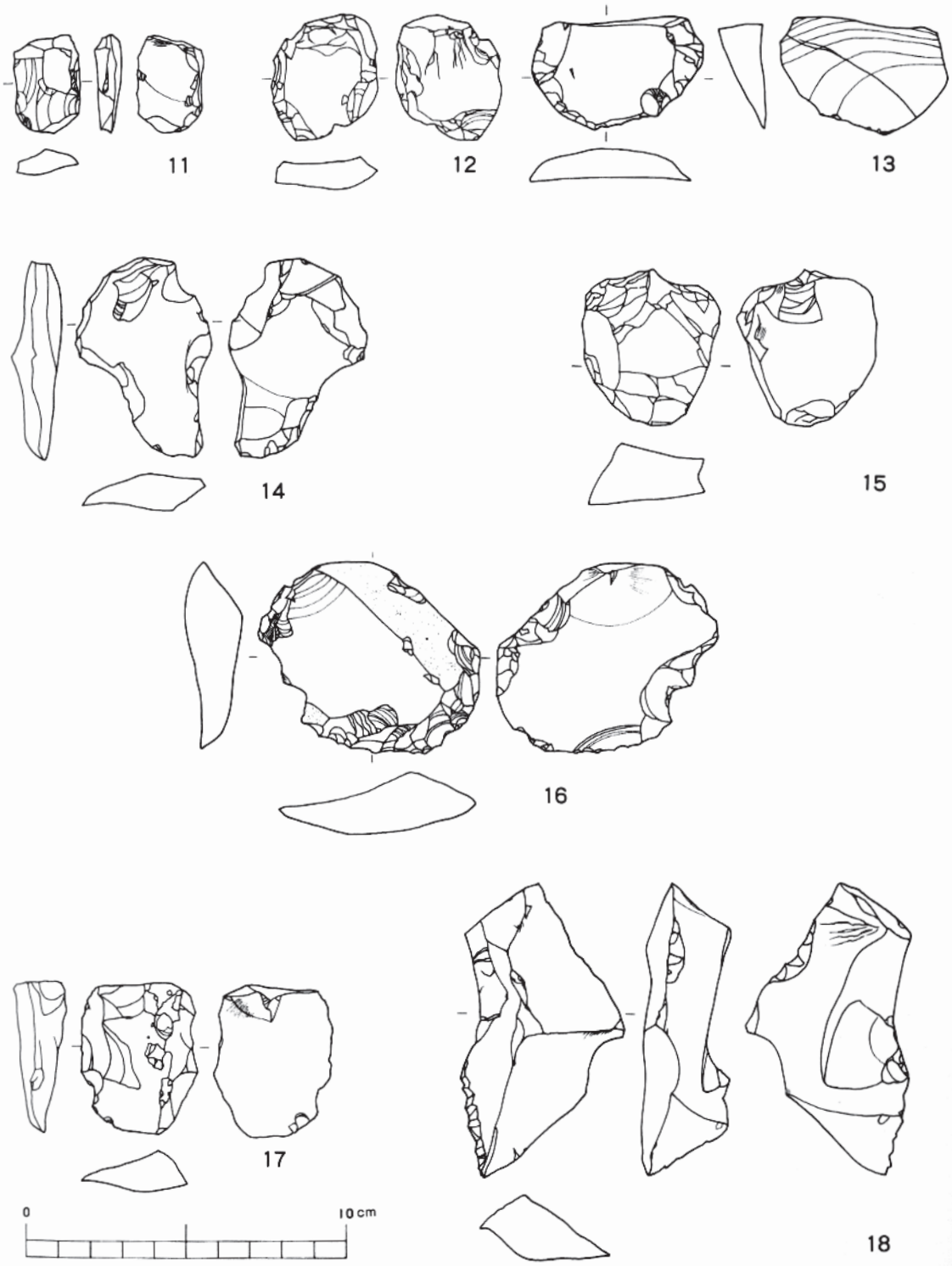
「剥片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でない石器」（五丁歩遺跡1992）を不定形剥片石器として識別した。識別できた点数は31点で、出土石器器種の75％を占める。本書では、清水上遺跡（新潟県教育委員会1990）、五丁歩遺跡（新潟県教育委員会1992）で示された分類を基にA～G類に分けて記述する。

A類（第15図11～16・図版15）

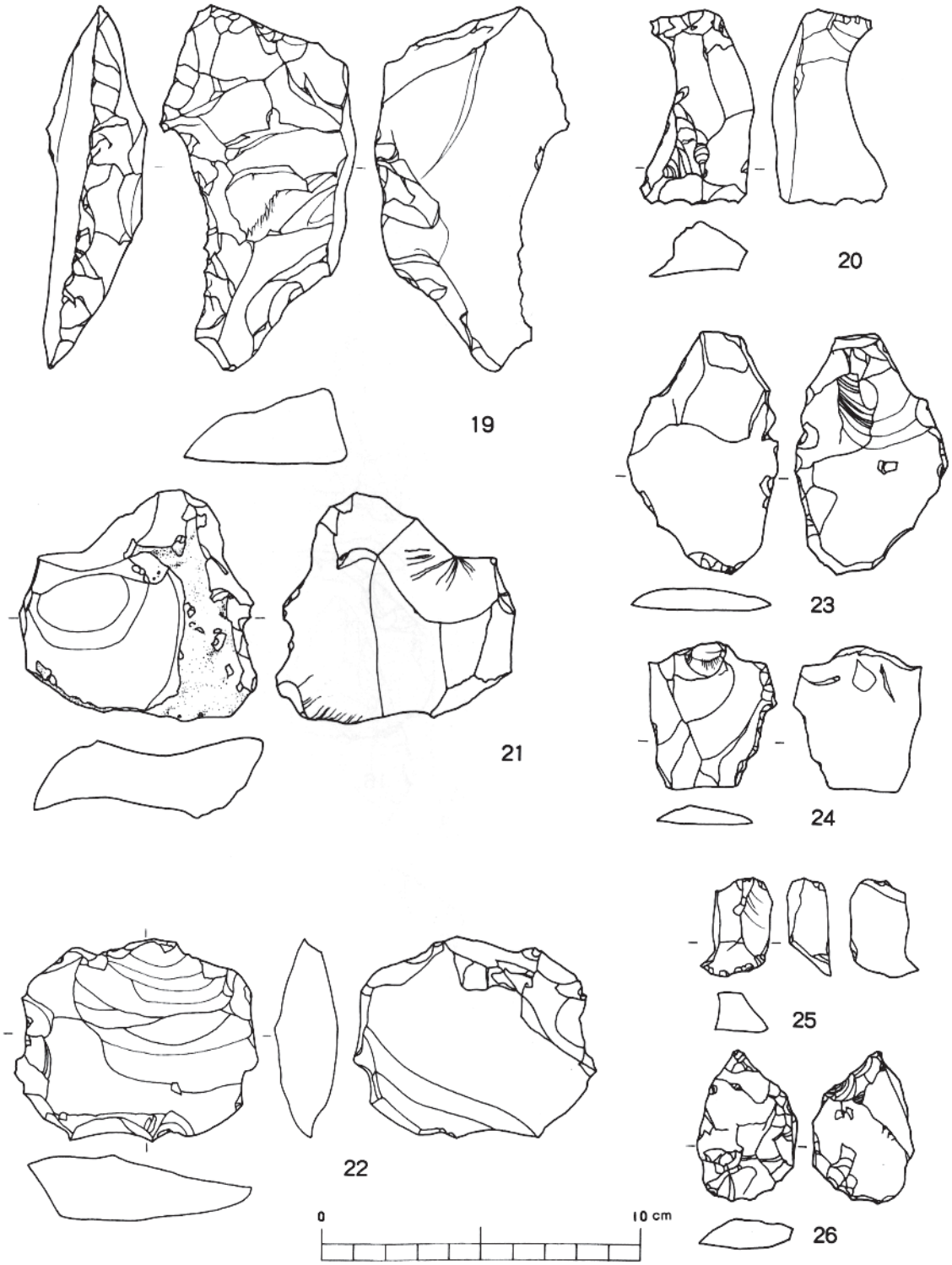
剥片の周縁に連続的な調整を加え刃部を作出したもので、いわゆるスクレイパー類に相当する。6



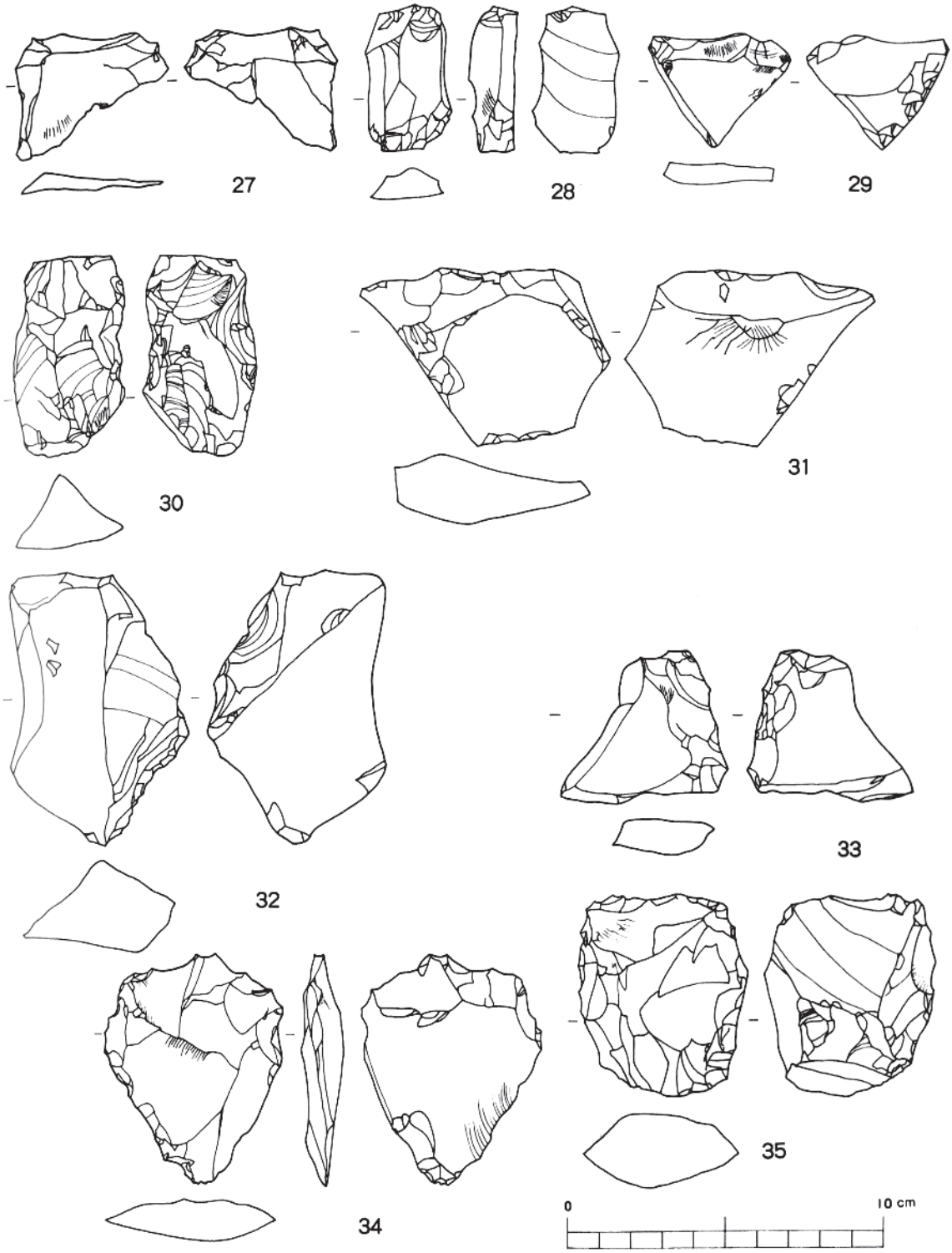
第14図　石　　器 (1)　S＝1／2



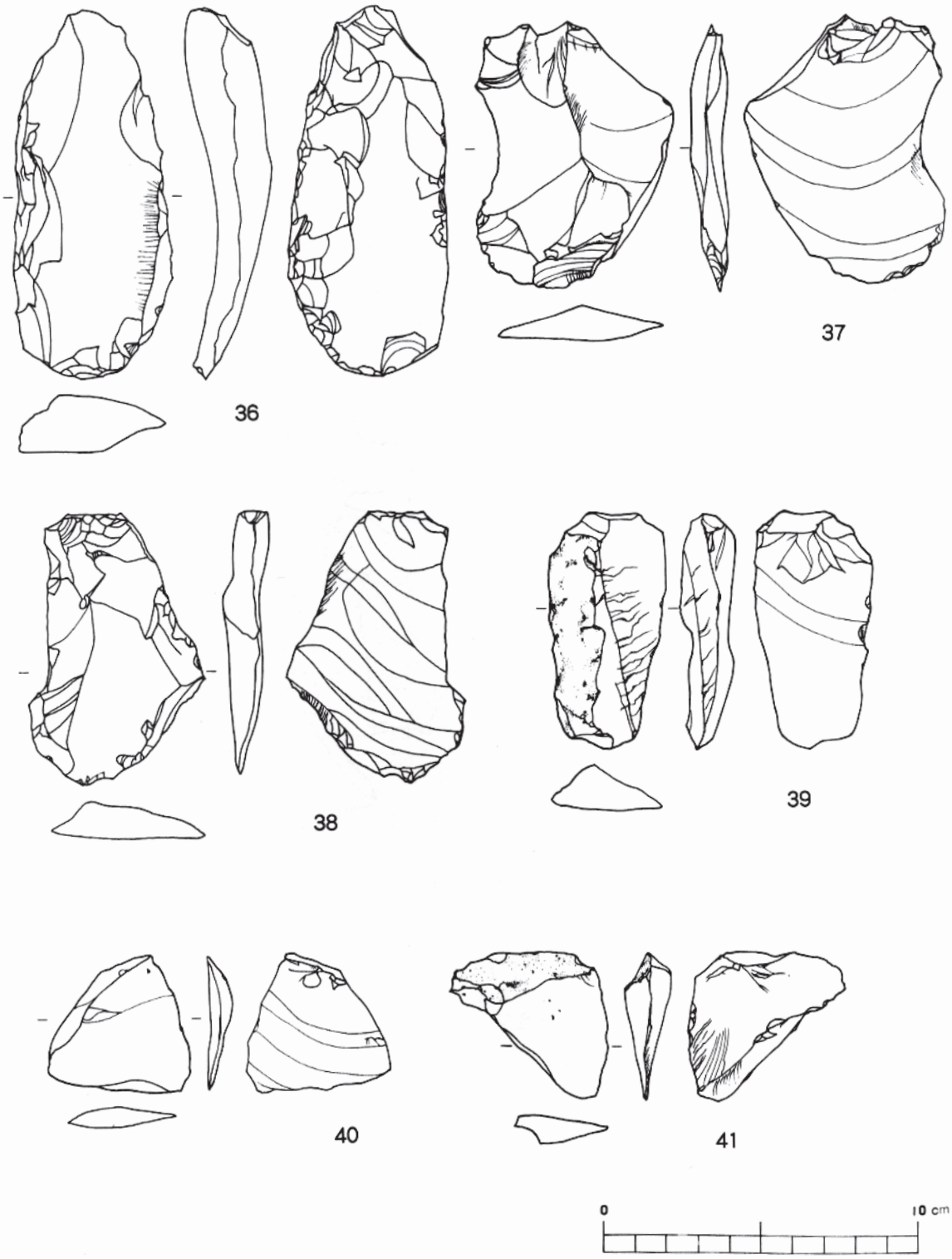
第15図　石　　器 (2) S＝1／2



第16図　石　　器 (3) S＝1／2



第17図　石　　器 (4) S＝1／2



第18図　石　　器 (5) S＝1／2

点出土した。素材は13と16が横長剥片で他は縦長剥片を使用している。刃部は12と14が両面加工が施される他は、片面加工である。調整はすべて、微細～小さく、16を除いて急斜度である。11、12、16は打面が非調整である。石材は頁岩系と流紋岩が半分づつを占める。頁岩系は厚手の剥片を使用しており、用途の差を反映しているのかもしれない。

B類（第15、16図17～19・図版15）

剥片の縁辺の一部に抉入状の刃部を作出したもので、抉入石器またはノッチ状石器と呼ばれているものである。3点出土した。素材剥片の形状を変えず、片面加工を施している。刃部の小さいもの（17・18）、刃部の大きいもの（19）に分けられる。また、19は直線状と内湾状の刃部を持つ。18は石核44と接合する。

C類（第15図20～22・図版16）

剥片の縁辺の一部に鋸歯状の刃部を作出したもので、鋸歯縁石器または鋸歯状石器と呼ばれているものである。3点出土した。20は縦長剥片の底縁に、やや大きめの剥離で刃部を作っている。21、22は横長剥片を素材とし、21は右側縁、22は左側縁から底縁にかけて大ぶりな剥離で刃部を作る。いずれも片面加工で、厚手の剥片を使用している。

D類（第16、17図23～27・図版16）

剥片の縁辺の一部に中～小型の不連続剥離を施し刃部を作出したものである。27が横長剥片を素材とする他はすべて縦長剥片である。いずれも片面加工で、小型で薄手の剥片を使用している。刃部の形状からいわゆるスクレイパー類に含まれるものも有るかもしれない。また27は小型剥離のためG類との区別が難しい。

E類（第17図28～32・図版17）

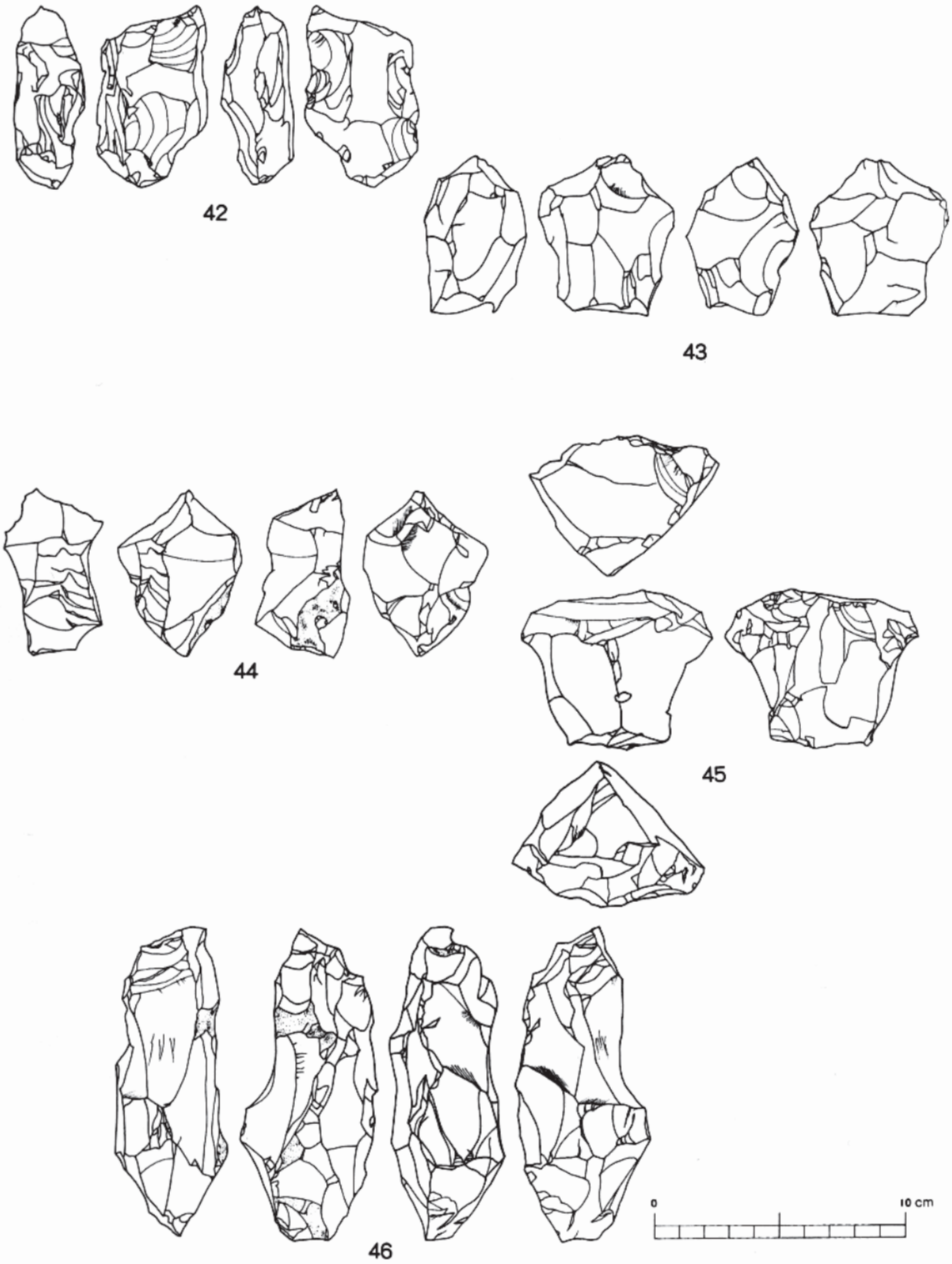
その他の二次加工を施したグループを一括した。D類に比べ、やや厚手の剥片を素材とし、小型～微細な不連続剥離を施し刃部を作出する。刃部の形状も直線、外湾、内湾状のものがありバラエティーに富む。30は両設打面の石核から剥離されたものであろう。また、石材もバラエティーに富んでいる。

F類（第17、18図33～36・図版17）

両面加工（調整）石器と呼称されるものに相当し、厚手の剥片に大ぶりな剥離を正裏面に施している。刃部断面はジグザグ状を呈する。加工は正裏面深くまで入るものは少なく、一ないし二側縁部に認められる。36は長さ11.8cmを測る大形品で、断面は緩い弧状を描く。底縁部にもやや細かい調整を施し刃部を作る。いわゆるスクレイパー類に含まれるかも知れない。

G類（第18図37～41・図版18）

いわゆる使用痕のある剥片で、37～39は縦長剥片、40、41は横長剥片を素材としている。37は左側縁～底縁部にかけてを刃部とし、刃部の形状は内湾、外湾状を呈する。38は打面部を除いたほ



第19図　石　　器 (6) S＝2／5

ぼ全周に、39～41は右側縁部を刃部として使用している。37を除いて打面は非調整である。

石核（第19図42～46・図版18）

5点出土し、うち3点（42、44、45）が近接した場所からの出土である。42は2面の剥離作業面を持ち、正面は約90°、裏面は約180°づれた方向からの剥離を持つ。43、46は稜線上から、ランダムな剥離作業が施される。46は石核や剥離の形状から、主として縦長剥片の作出を目的としたことが窺われる。44は1面の剥離作業面に約90°づれた方向からの剥離を持つ。また、不定形剥片石器B類18と接合する。45は荒割りが2面以上行われ、同一方向の剥離を持つ剥離作業面を1面持つ。石材は43が頁岩の他は硬質頁岩である。

剥片類

総数150点出土し、石器、石核、剥片類のうち剥片類の占める割合は76％である。観察可能な資料124点のうち背面、打面ともに自然面のものが35％、背面が剥離面、打面に剥離が一つのものが25％を占めている。石材は頁岩系（硬質頁岩・頁岩）が90％以上を占め、他に鉄石英2、流紋岩3、凝灰岩2、玉髄1点が観察できた。剥片石器の使用石材と一致した傾向を示している。

自然礫類・面付石（図版19）

総数216点出土し、うち焼礫23点、面取石2点である。本遺跡はローム層上に立地していることから、自然礫類・面付石は搬入品と考えられる。焼礫の分布に偏りは見られないが、本来はまとまりを持って機能していたと思われる。面付石はいずれも6面体を呈し、石英粗面岩製である。天然石であり、加茂川上流で採取できる。

第2表　石器観察表

番号	器　種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備　考
1	石　刃	A－2－19	6.0	2.9	0.8	11.5	珪質　頁岩	
2	〃	B－2	6.9	3.2	0.9	22.0	硬質　頁岩	
3	〃	B－4－9	8.7	3.3	1.3	23.0	珪質　頁岩	
4	石　槍	B－5－24	(12.6)	(2.8)	(0.6)	(31.5)	頁　岩	基部欠損
5	〃	F－3－2	7.7	3.9	1.7	43.5	〃	
6	〃	C－6－20	7.6	4.7	1.4	50.0	安　山　岩	
7	磨　製　石　斧	C－4－13	(8.8)	(5.2)	(2.3)	(169.5)	石英粗面岩	刃部一部欠損
8	〃	表　採	(4.5)	(4.7)	(1.9)	(69.0)	〃	中央部以下欠損
9	ピエス・エスキーユ	C－3－13	4.9	3.5	0.7	9.0	凝　灰　岩	
10	擦痕のある剥片	A－5－15	4.0	3.9	0.7	13.5	砂　岩	
11	不定形剥片石器A類	E－5－6	3.1	2.1	0.8	6.5	流　紋　岩	
12	〃	F－2－9	4.0	3.3	1.0	17.0	〃	
13	〃	B－5－17	6.0	7.0	2.0	29.5	硬質　頁岩	
14	〃	D－4－13	6.2	4.3	1.5	34.0	流　紋　岩	
15	〃	B－5－14	4.9	4.3	1.9	49.0	硬質　頁岩	

番号	器　　種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備　　考
16	不定形剝片石器A類	A－6－3	5.4	6.9	1.8	68.5	珪質　頁岩	
17	不定形剝片石器B類	F－5－23	4.7	3.7	1.5	21.5	硬質　頁岩	
18	〃	E－3－10	9.1	5.1	2.7	80.5	〃	
19	〃	F－3－2	11.4	6.1	3.1	150.5	頁　　岩	
20	不定形剝片石器C類	E－3－10	6.2	3.6	1.7	34.5	〃	
21	〃	E－3－10	7.3	7.5	2.8	126.5	硬質　頁岩	
22	〃	A－6	6.3	7.7	2.1	98.5	〃	
23	不定形剝片石器D類	C－5－3	7.5	3.7	0.7	31.5	頁　　岩	
24	〃	C－6－1	4.6	4.0	0.7	15.0	〃	
25	〃	D－2－10	3.1	2.2	1.3	8.5	〃	
26	〃	C－4－15	4.8	3.1	1.0	15.5	硬質　頁岩	
27	〃	D－4－15	4.0	4.8	0.7	8.0	?	
28	不定形剝片石器E類	E－3－10	4.7	2.7	1.5	21.5	玉　　髓	
29	〃	D－2－17	3.7	4.5	0.7	11.5	凝　灰　岩	
30	〃	E－4－2	6.4	3.6	2.4	59.0	鉄　石　英	
31	〃	F－6－11	5.6	7.9	2.2	67.5	頁　　岩	
32	〃	E－3－23	8.6	5.7	3.0	80.5	流　紋　岩	
33	不定形剝片石器F類	B－5－4	4.8	5.3	1.1	31.5	硬質　頁岩	
34	〃	C－5－10	7.3	5.7	1.4	53.0	頁　　岩	
35	〃	B－4－10	6.4	5.4	2.6	78.0	硬質　頁岩	
36	〃	D－4－8	11.8	5.1	2.7	123.5	〃	
37	不定形剝片石器G類	表　　採	8.5	6.3	1.1	57.0	〃	
38	〃	B－2	8.6	5.5	1.5	55.0	〃	
39	〃	表　　採	7.5	3.7	1.6	42.5	〃	
40	〃	D－2－2	4.3	4.6	0.7	16.0	頁　　岩	
41	〃	D－5－7	4.8	5.0	1.0	19.5	〃	
42	石　　核	F－3－2	7.1	4.4	2.9	81.5	硬質　頁岩	
43	〃	A－5－22	6.3	5.4	4.4	103.0	頁　　岩	
44	〃	E－3－10	6.5	5.0	4.0	81.0	硬質　頁岩	
45	〃	F－3－2	6.3	7.7	5.6	204.0	〃	
46	〃	C－6－9	12.4	5.5	4.6	245.0	〃	

註：※計測値の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重量はgである。

※計測値の（ ）表示は、現在長を示す。

※石材については、加茂暁星高校の高橋明教諭に御教示いただいた。

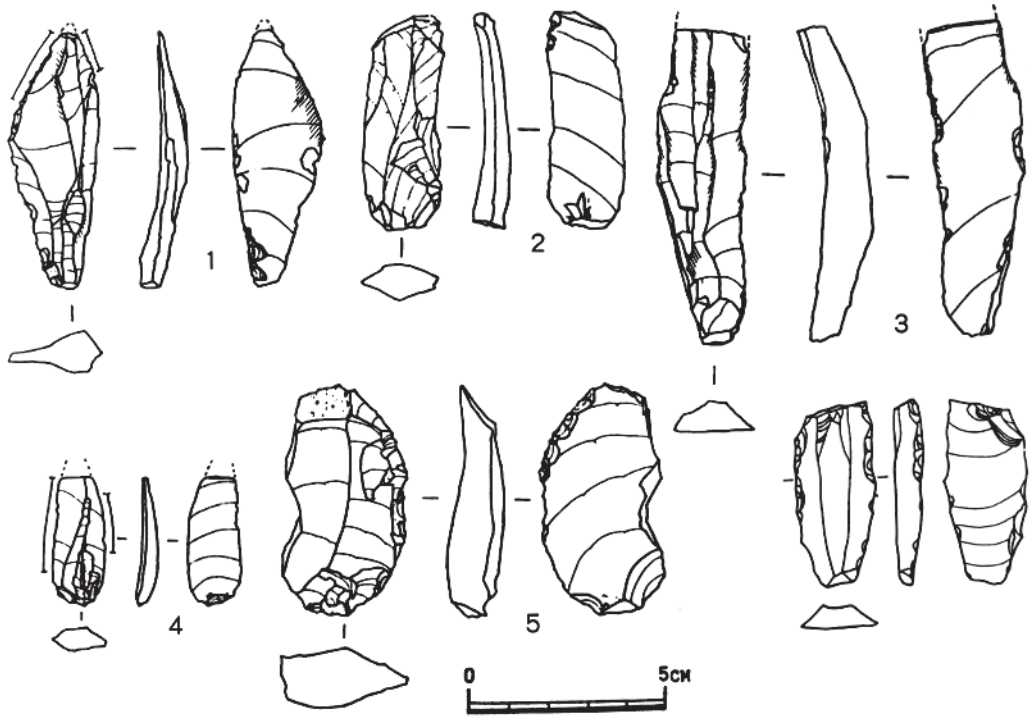
VI　ま　と　め

今回の発掘調査により、牛ケ沢Ｂ遺跡では旧石器時代～縄文時代後期に及ぶ人間の活動が明らかになった。その中でも、主体をなす時期は遺物量から判断して、縄文時代前期に求められる。土器は縄文時代前期前半～終末期にかけてと縄文時代後期前葉のものが見られるが、草創期、早期、中期土器は未検出で、間をおいた長期継続的な活動が窺える。また、前期後半期の土器形式上でも何段階かの欠落が見られ、前期の中でも活動の空白期があったと考えられる。以下、本遺跡の特徴を述べる。

遺構は、調査範囲が約729m²と狭い中ではあるが、土坑８基、小穴12基のみの検出であり、希薄な状況と言える。調査区南半部に集中するが、関連性は明らかではない。SK1が盤状石の存在から、墓坑と考えられる他は、遺物もほとんど伴わず、時期、性格とも不明である。

出土遺物の内訳（第８図）からは、石器が少ないことが分かる。しかし、遺物の項でも述べたが、土器は細片も一点として数えており、実際の個体数は半減する。よって、土器も多いとは言えず、剥片類、自然礫類の多さが目立つ。

土器は前期前半期が前期後半期に比してやや多く、第Ⅰ群土器は、繊維、金雲母を多量に含むことが特徴である。この、繊維を混入する手法は微弱になりつつも、第Ⅲ群土器の黒浜式期まで認められる。第Ⅱ群土器の底部にまで爪形刺突を施す第11図15は、東北地方との関係が指摘され、土器



第20図　岩野原Ｂ遺跡・山王原遺跡出土石器 S＝1／2

の系統を考える上で注目される。第Ⅲ群から第Ⅳ群、第Ⅳ群から第Ⅴ群土器期にかけての間にそれぞれ、諸磯a、諸磯c式期の欠落が見られる。

石器は、石刃、石槍を除いた他すべては縄文前期の所産と考えられる。石器器種は少なく、不定形剥片石器が卓越する。不定形剥片石器の一遺跡の中で占める割合の高さは、多くの遺跡で知られており、特別視できないが、一般的な生活用具は揃っていない。石材は遺跡周辺で採取可能な頁岩系が9割以上を占め、剥片類も同様である。

上記の諸特徴から縄文時代前期の遺跡の性格について述べるならば、定住的な集落とは異なる、一時的な居住を行った場所、キャンプ地と解釈することが通説であったと思われる。しかし、該期は定住的な集落をイメージさせる竪穴住居址は極めて限定されたもので、遺物のみ出土する遺跡も多く見られる。また、本遺跡に近接した地域における前期の調査事例でも、竪穴住居址の検出例はなく、炉址・集石・土坑・焼礫（下田村　中土奥入遺跡）、集石・土坑（下田村　下山遺跡）、集石（下田村　賽の神遺跡）が検出されているに過ぎず、遺構が存在しない遺跡（下田村　布倉橋遺跡）も見られるのが現状であり、近年の関東地方における前期末葉の調査事例から、焼土群と土器の集積の関連を重視し、「焼土群が検出された空間を『居住』に準ずる生活領域、土器の集積した空間を廃棄領域」として積極的に位置づけ、竪穴住居址のみを居住痕跡とみることに批判的な論考（渋江・黒尾 1987）が見られることなどから、該期は竪穴住居址を伴わない遺跡が一般的であることが予想される。つまり、竪穴住居址以外の居住痕跡の存在を考えなければならないのである。さらには、本遺跡は前期前半を中心とした、一定期間の継続的な利用がなされていること、自然礫を多数搬入し、調理施設と関係した機能が窺えることなどから、キャンプ地と解することに若干の疑問を持たざるを得ない。キャンプ地の内容、定義とも関連しようが、今後の調査や周辺部の分布調査によっては、ある程度の居住期間を意図した小規模集落址、あるいは定住的集落の縁辺部として位置づけることが可能になるのではないだろうか。現段階では全くの推測の域を出ず、今後に期待するばかりであるが、竪穴住居址を持つ定住的集落との関係を含め、本遺跡の持つ意義は小さくないであろう。

また、わずか2点のみの出土であるが、面付石は祭祀に関係する遺物と考えられており（川上1986）、本遺跡でも何らかの祭祀が行われていた可能性もある。

縄文時代前期以前の遺物も貴重な資料となった。石刃は第20図に示した例に次ぐ3番目の発見であり、石槍は加茂市では初例となろう。旧石器時代の確認トレンチ（深さ約30cm）を10ケ所いれたが、遺物は未発見であった。下田村の中土奥入遺跡では、姶良Tn火山灰（約2.2万年前）がローム層下約10cmのところで確認されており、本遺跡地も地理的な近さから同様なことが十分考えられる。今後の調査では、比較的浅い所での後期旧石器時代の遺構・遺物に注意する必要がある（小熊氏教示）。

最後にあたり、土器については小熊博史氏、前山精明氏、石器については鈴木俊成氏に多大なご教示を賜ったが、十分活かしきれなかった。筆者の非力を詫び、改めて御礼申し上げます。

引用・参考文献

小野昭・小熊博史　1987 「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅲ　巻町

小野昭・前山精明ほか　1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　巻町

金子正典ほか　1984 『中土奥入遺跡』 下田村教育委員会

加藤晋平・鶴丸俊明　1991 『図録石器入門事典　先土器』 柏書房

加茂市　1975 『加茂市史　上巻』

川上貞雄　1986 『七谷忠魂碑遺跡』 加茂市教育委員会

川上貞雄ほか　1987 『東部地区遺跡詳細分布調査報告書』 加茂市教育委員会

北村亮ほか　1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告第56集　岩原Ⅰ遺跡　上林塚遺跡』
新潟県教育委員会

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史　1984 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（1）」
『長岡市立科学博物館研究報告』第19号

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史　1985 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（2）」
『長岡市立科学博物館研究報告』第20号

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史　1986 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（3）」
『長岡市立科学博物館研究報告』第21号

駒形敏郎・小熊博史　1989 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（6）」
『長岡市立科学博物館研究報告』第24号

三条商業高等学校社会科クラブ考古班　1980 『五十嵐川流域における先史遺跡VOL.2』

渋江芳浩・黒尾和久　1987 「縄文時代前期末葉の居住形態〈予察〉」『貝塚』39　物質文化研究会

白石浩之　1989 『旧石器時代の石槍　UP考古学選書［7］』 東京大学出版会

高橋保雄・鈴木俊成ほか　1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告第55集　清水上遺跡』
新潟県教育委員会

高橋保・高橋保雄ほか　1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告第57集　五丁歩遺跡　十二木遺跡』
新潟県教育委員会

寺崎裕助　1990 「第5節　前期の土器」『柏崎市史　上巻』 柏崎市

中島栄一ほか　1977 『下山遺跡』 下田村教育委員会

中村孝三郎　1981『柿の木平・中段・賽の神遺跡』 下田村教育委員会

新潟県　1983 『新潟県史　資料編Ⅰ　原始・古代－考古編』

藤巻正信ほか　1980『布倉橋遺跡』 下田村教育委員会

藤巻正信ほか　1991 『新潟県埋蔵文化財調査報告第29集　城之腰遺跡』 新潟県教育委員会

前山精明・山口栄一　1986 「巻町福井南部における遺跡分布と出土・採集遺物」
『巻町史研究』Ⅱ　巻町

写 真 図 版

遺跡周辺の航空写真（右斜め上が北）

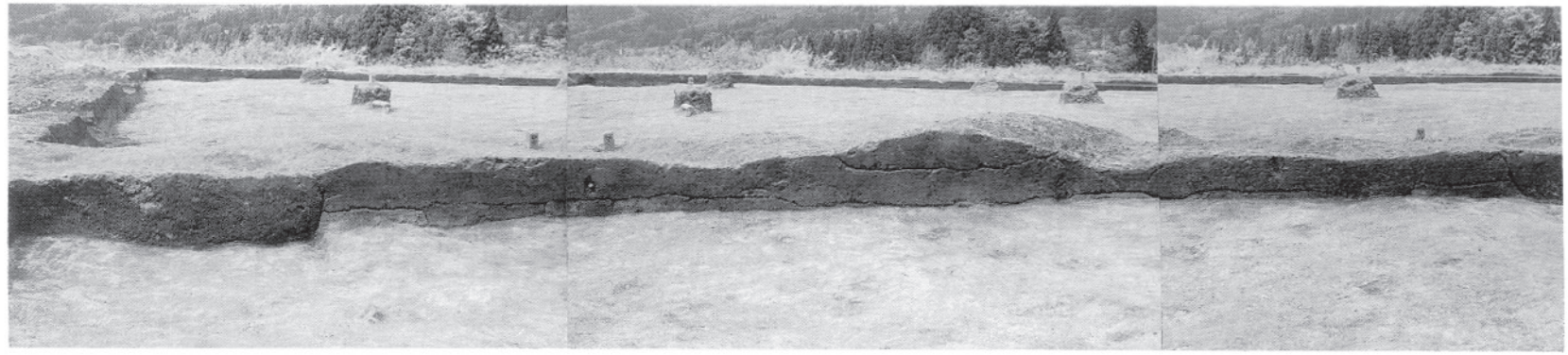
1. 遺跡遠景（北西から）

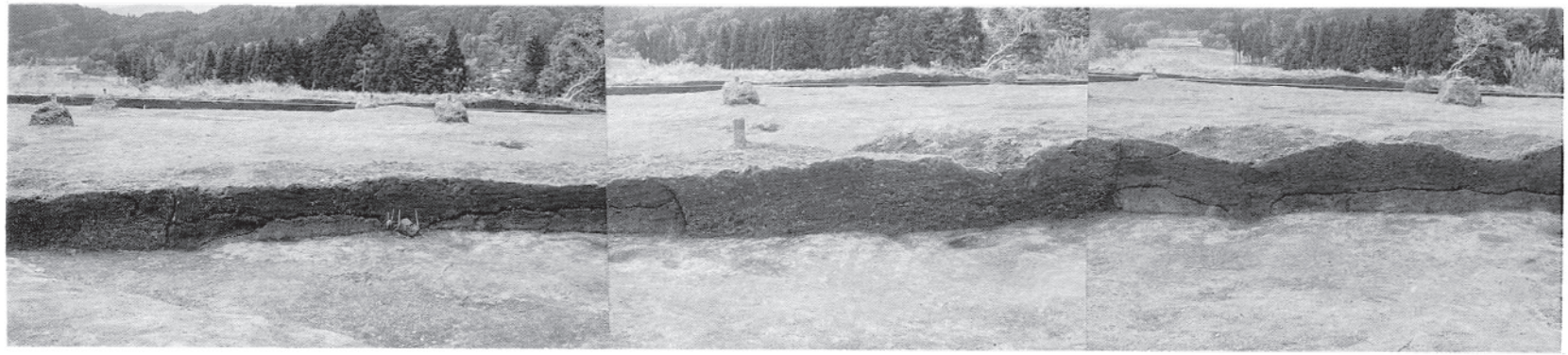
2. 遺跡近景（南西から）

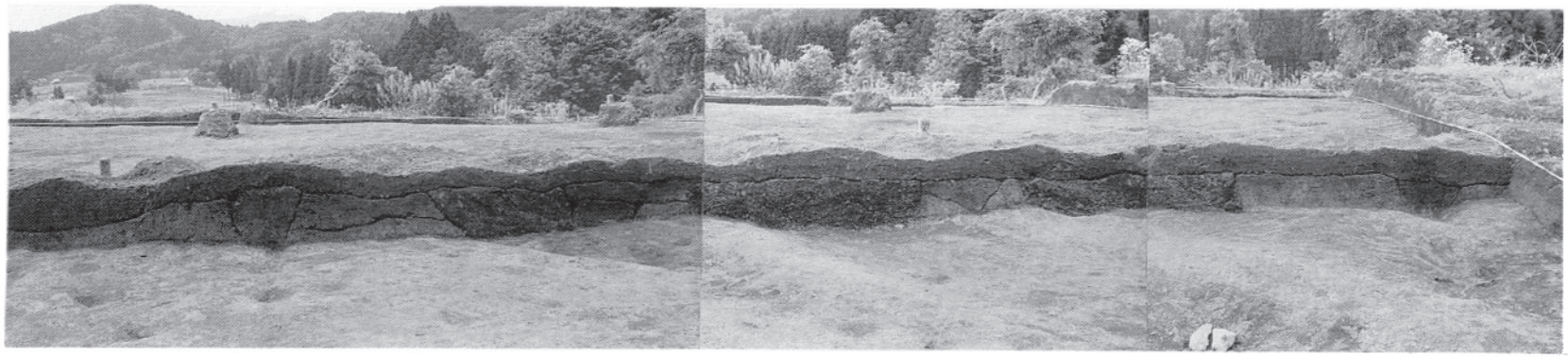
1. 発掘調査風景

2. 発掘調査風景

A







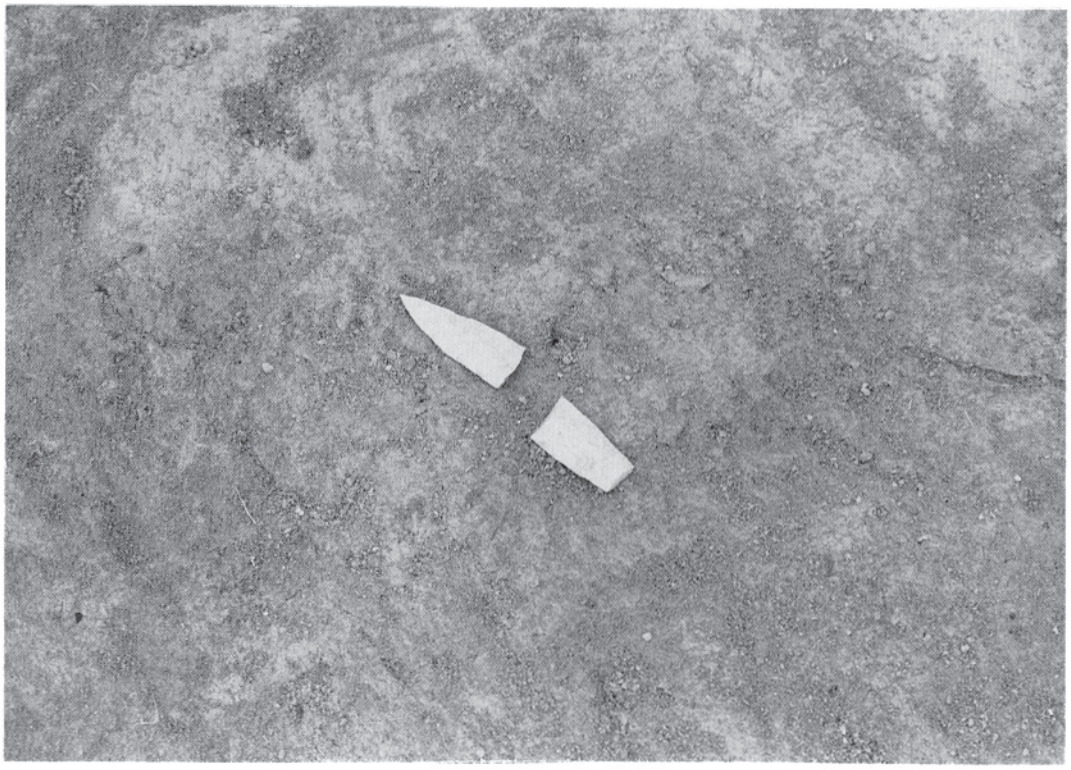
B

遺跡の層序（南から）

1. 遺物出土状況（西から）

2. 遺物出土状況（西から）

1. 磨製石斧出土状況（西から）



2. 石槍出土状況（西から）

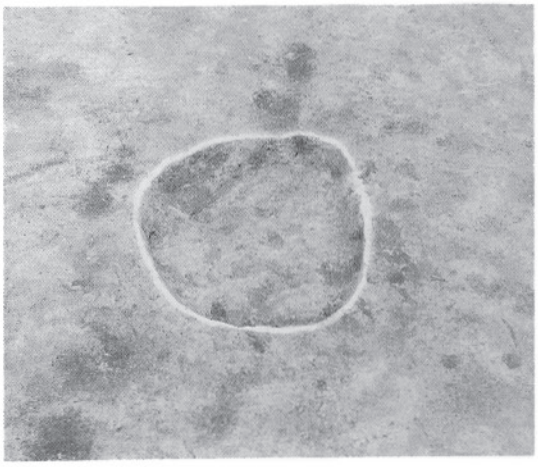
1. SK1 確認状況（西から）

2. SK1 セクション（東から）

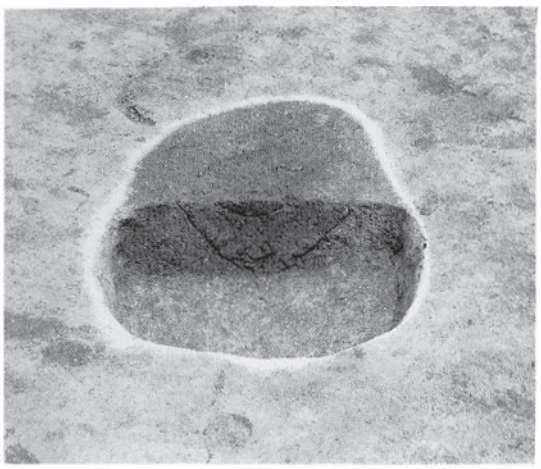
3. SK1 完掘状況（北から）

4. SK5 確認状況（北西から）

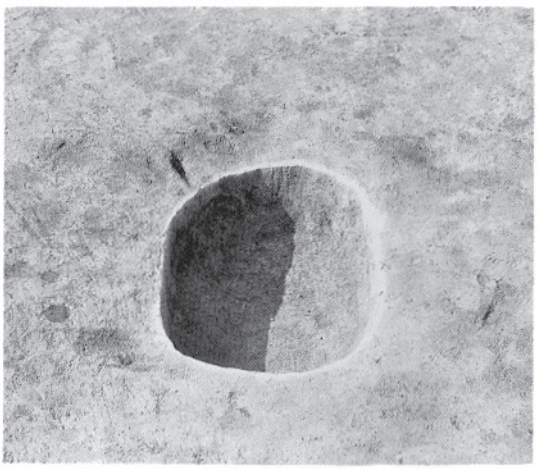
5. SK5 セクション（東から）



6. SK5 完掘状況（南から）



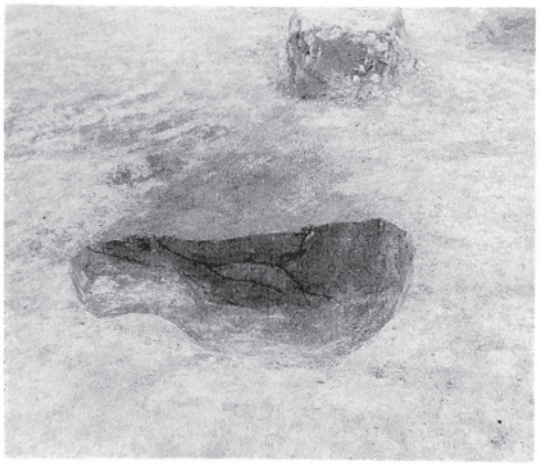
1. SK2 セクション（南から）



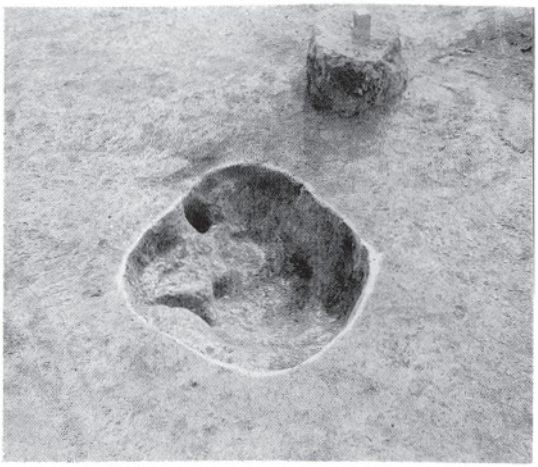
2. SK2 完掘状況（南から）

3. SK3 セクション（南から）

4. SK3 完掘状況（南から）

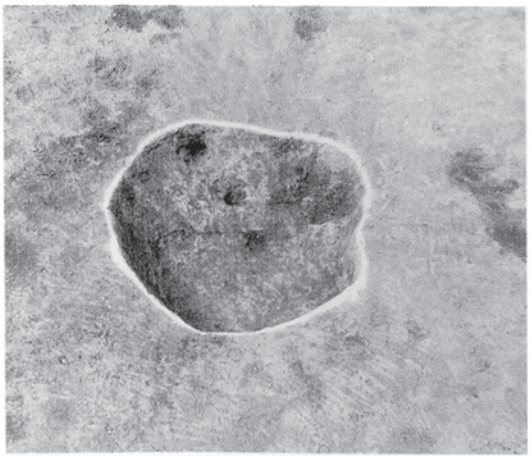


5. SK4 セクション（東から）

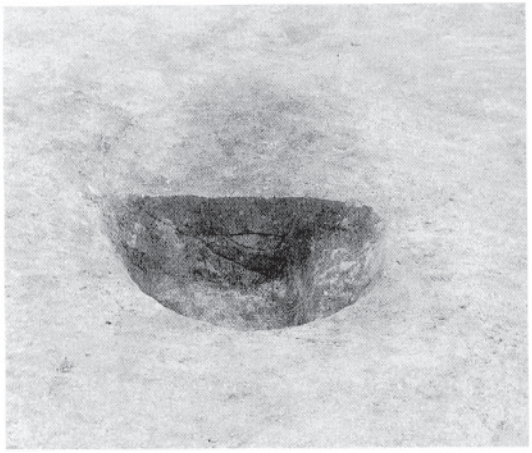


6. SK4 完掘状況（東から）

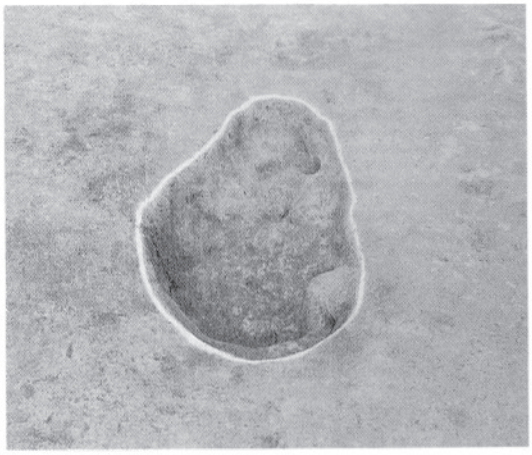
1. SK6 セクション（南から）



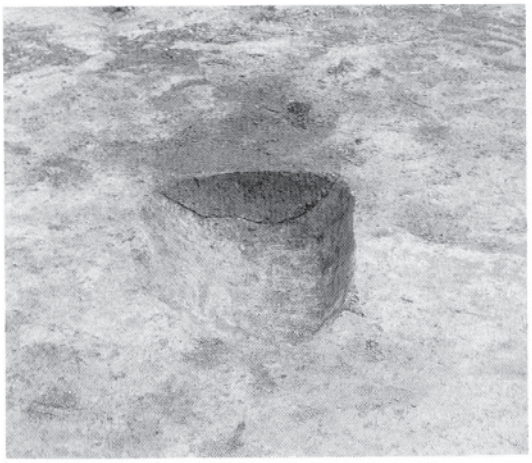
2. SK6 完掘状況（南から）



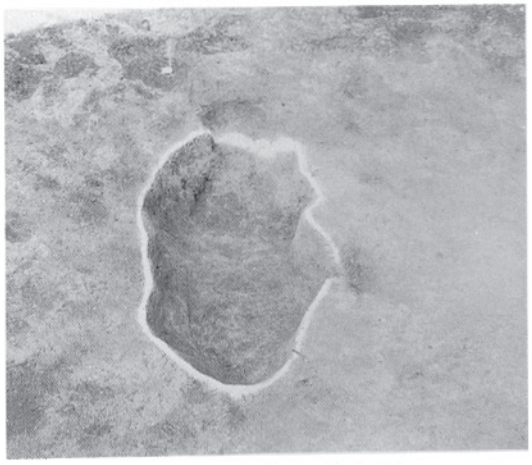
3. SK7 セクション（西から）



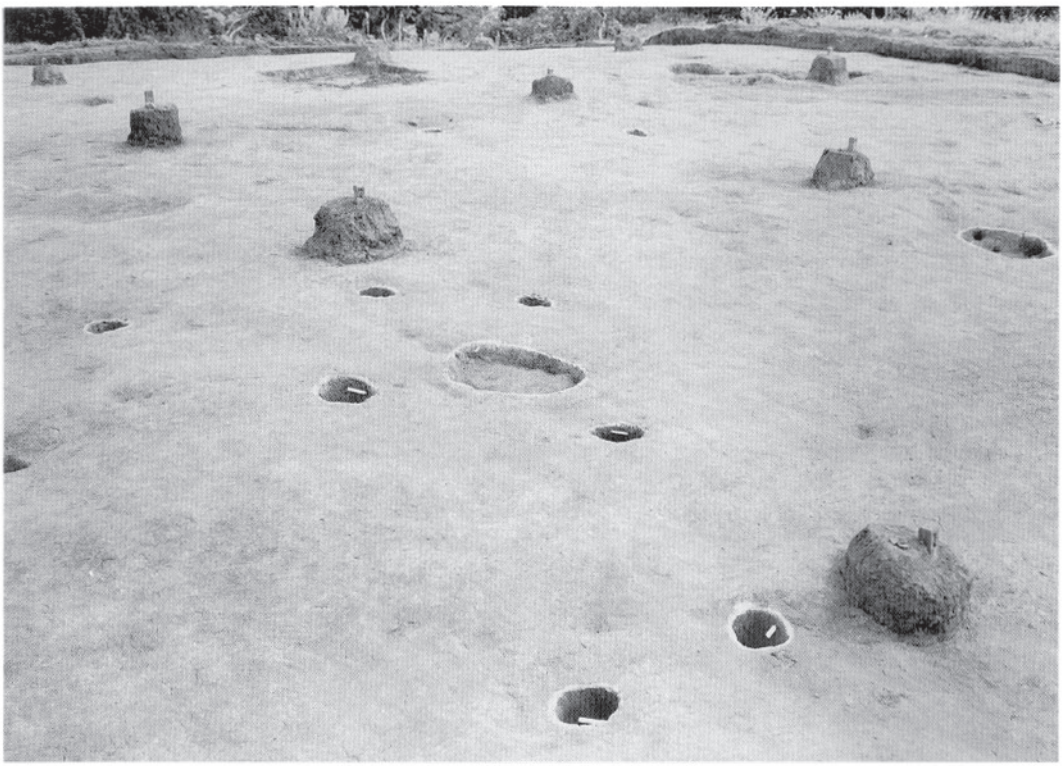
4. SK7 完掘状況（西から）



5. SK8 セクション（南から）

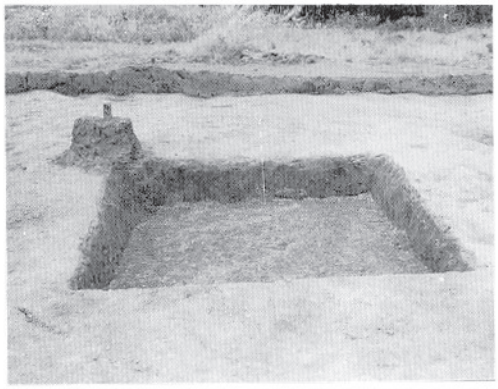


6. SK8 完掘状況（南から）

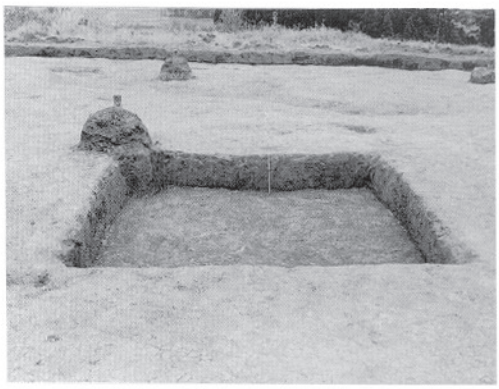


1. 遺構完掘状況（南から）

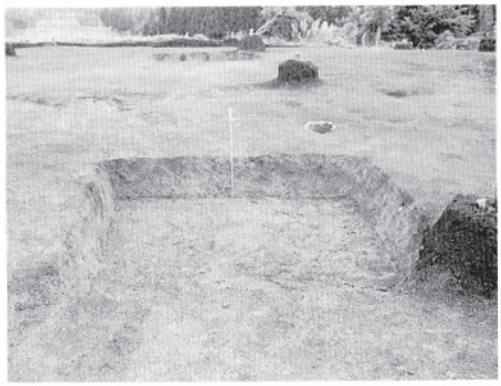
2. 遺跡完掘全景（西から）



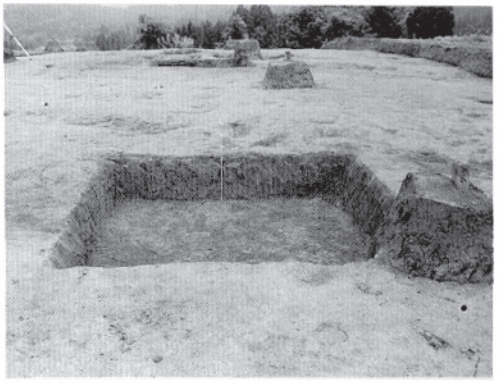
1. 旧石器確認トレンチ 1 完掘状況（南から）



2. 旧石器確認トレンチ 3 完掘状況（南から）

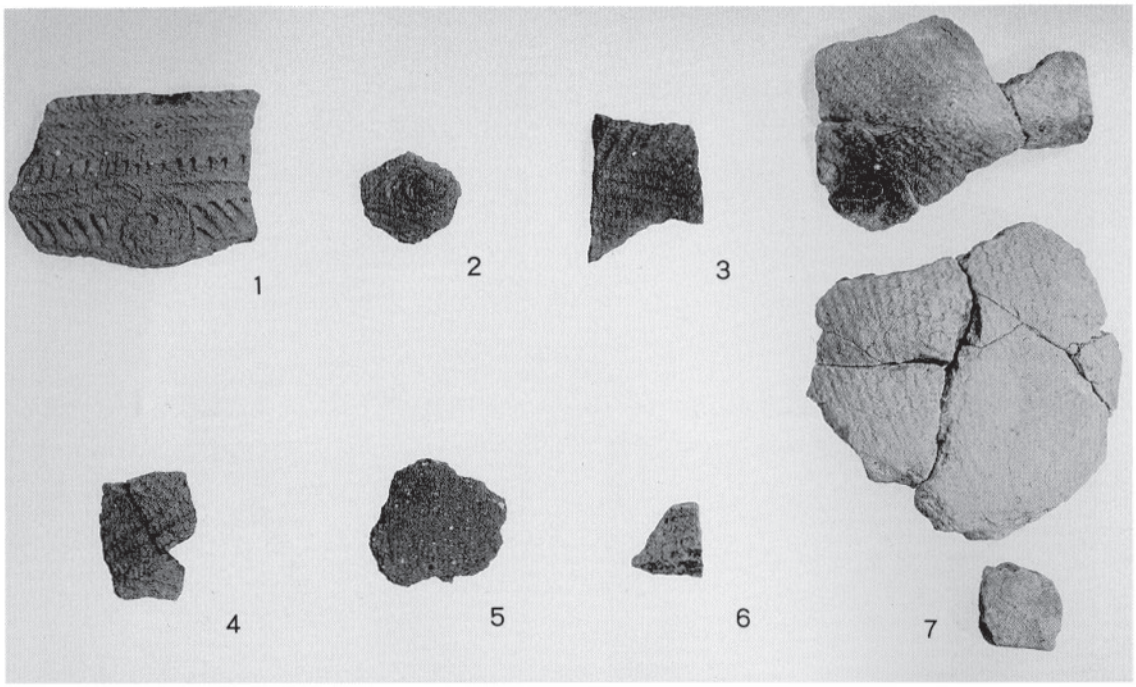


3. 旧石器確認トレンチ 8 完掘状況（南から）

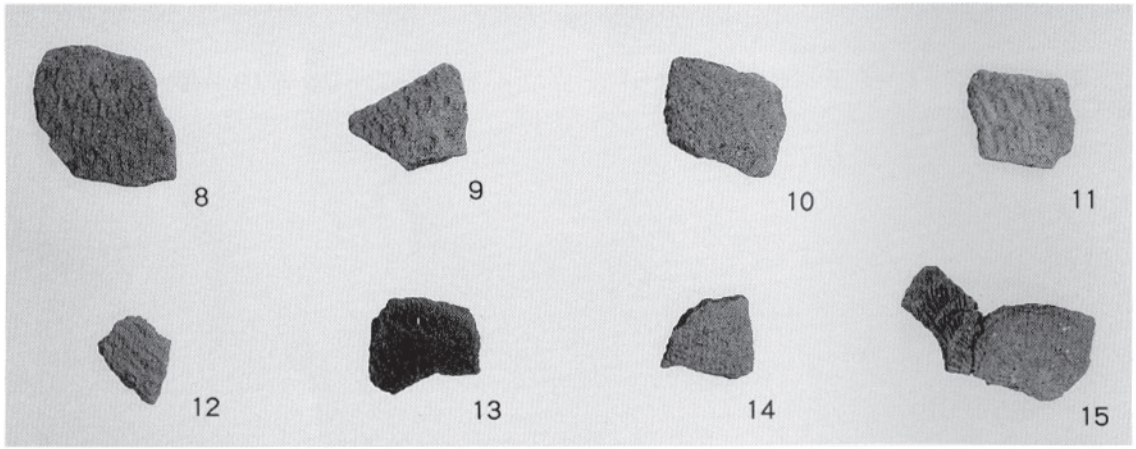


4. 旧石器確認トレンチ 10 完掘状況（南から）

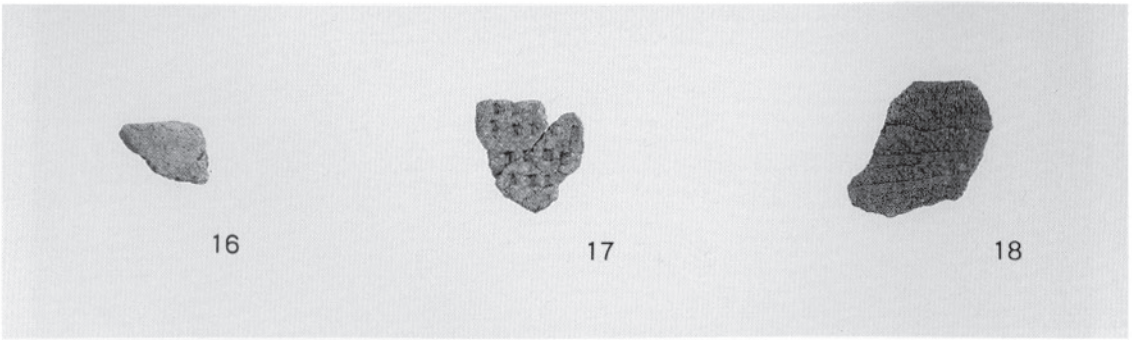
5. 旧石器確認トレンチ全景（西から）



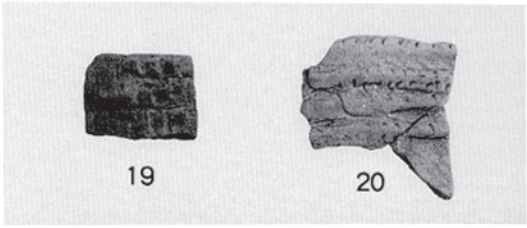
1. 第Ⅰ群土器 S＝約1／3



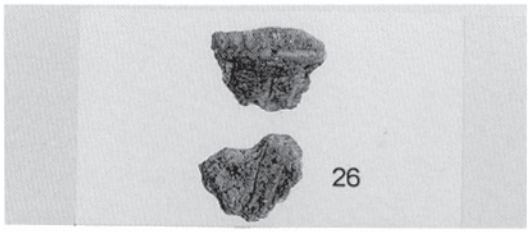
2. 第Ⅱ群土器 S＝約1／3



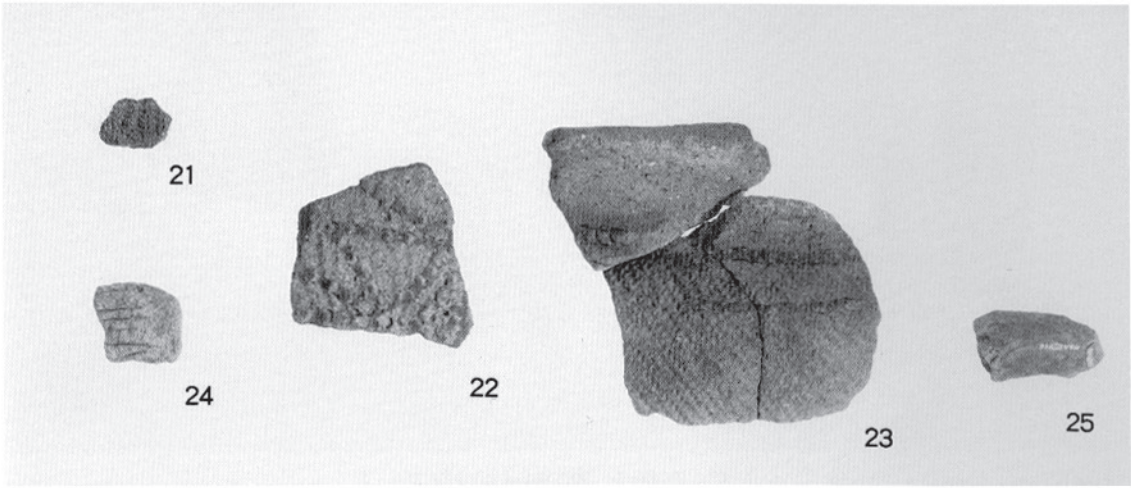
3. 第Ⅲ群土器 S＝約1／3



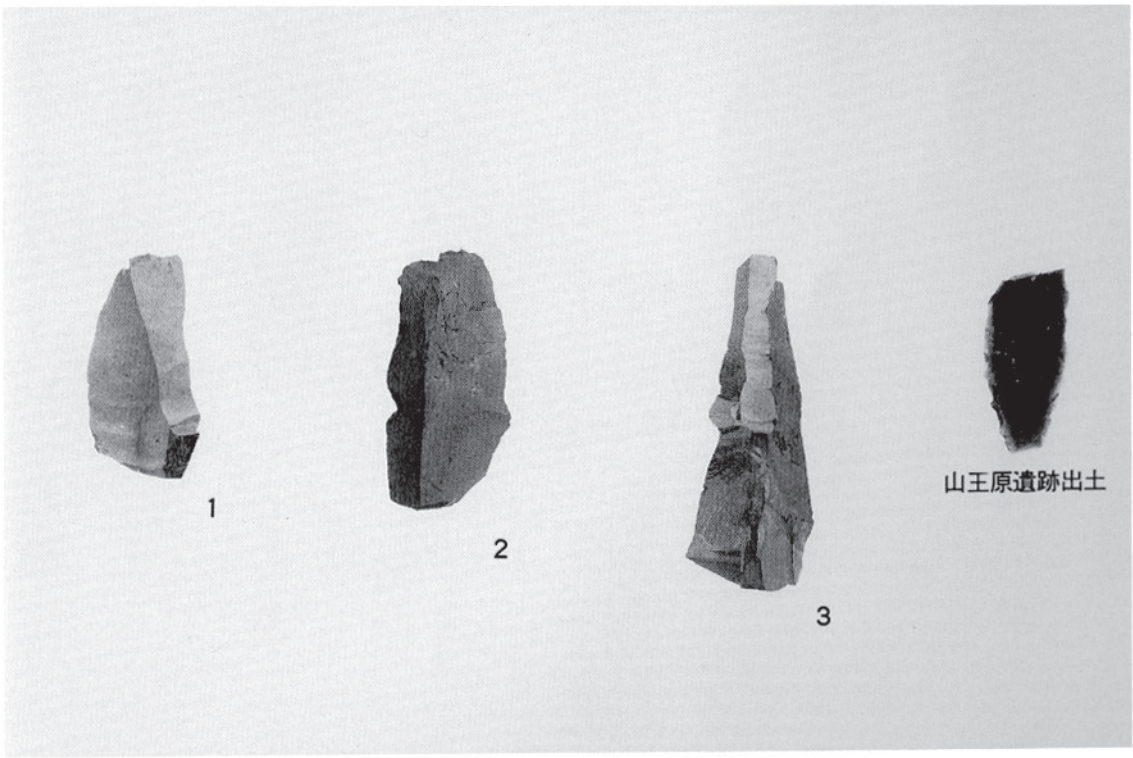
1. 第Ⅳ群土器 S＝約1／3



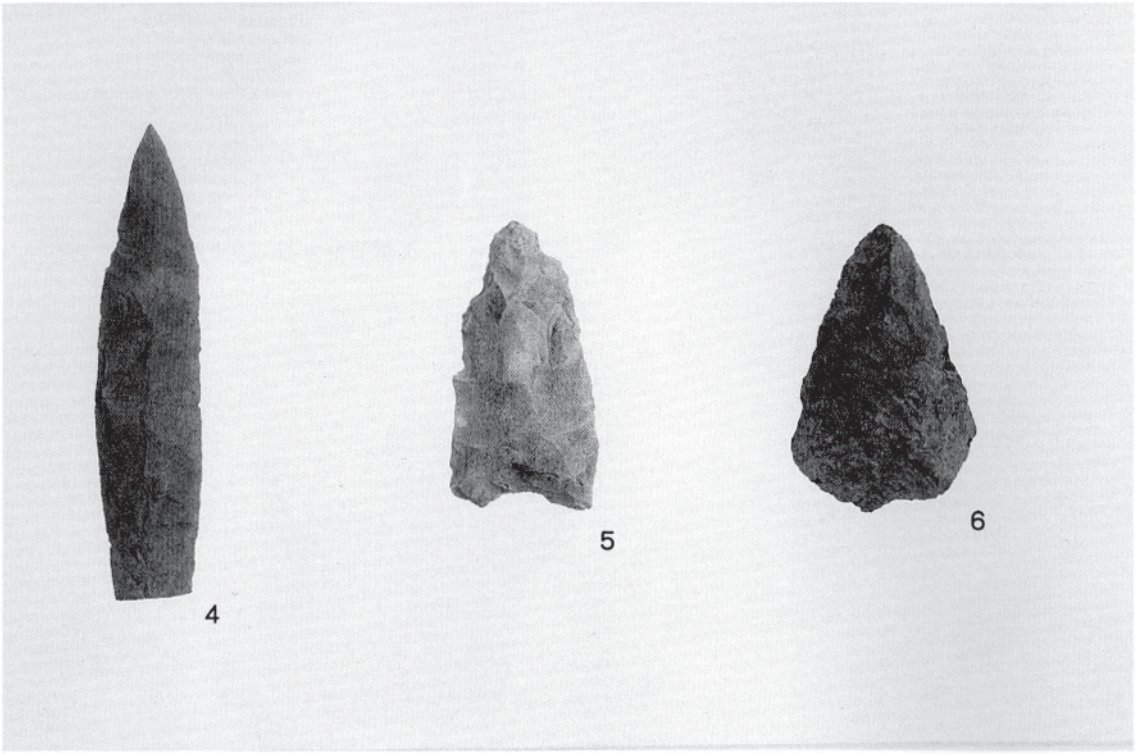
3. 第Ⅵ群土器 S＝約1／2



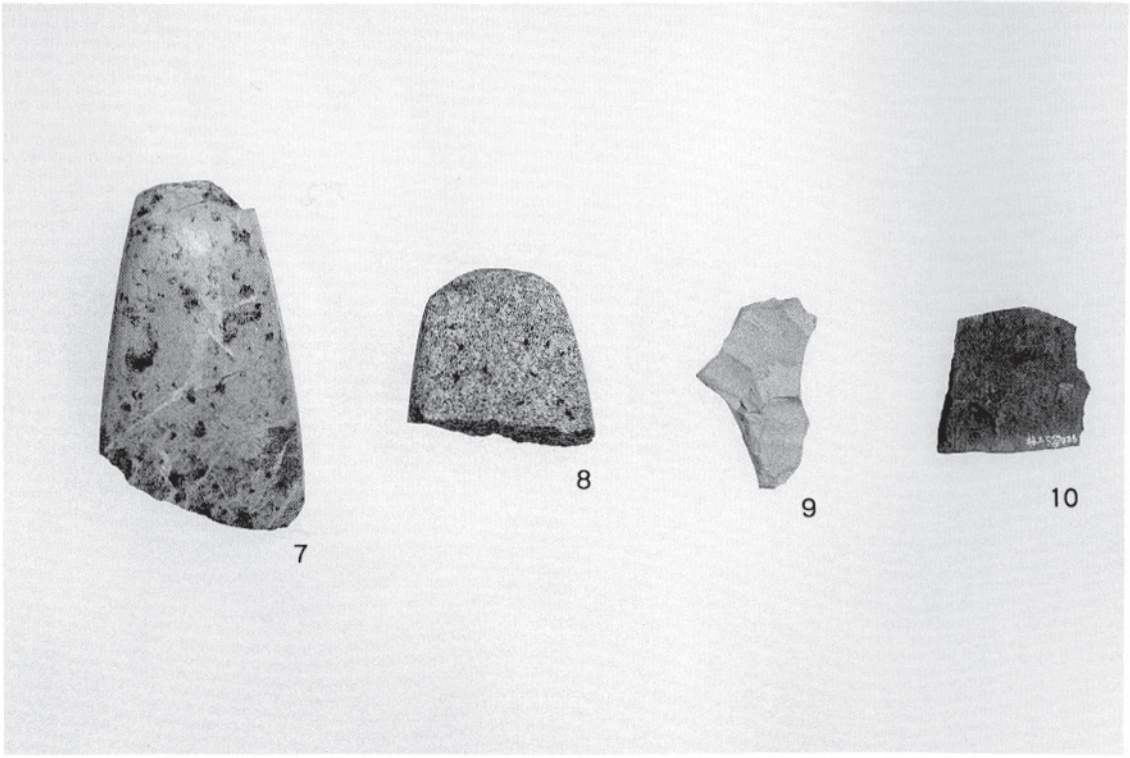
2. 第Ⅴ群土器 S＝約1／3



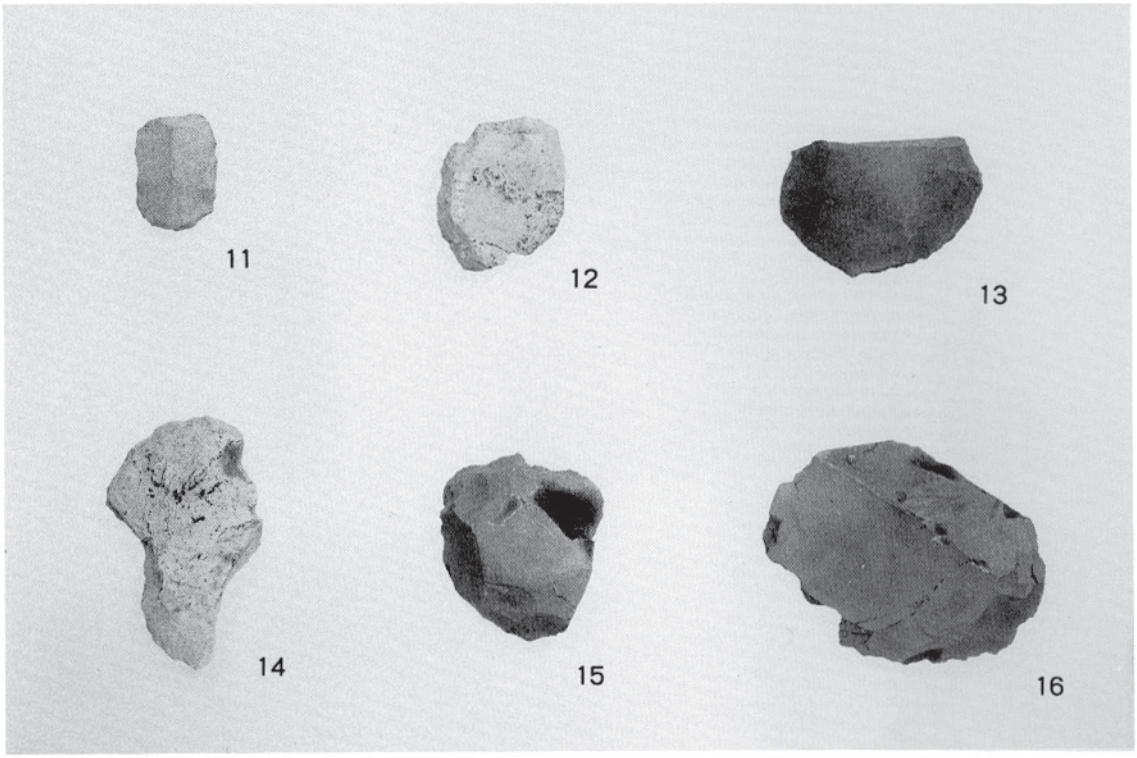
4. 石　　刃 S＝約1／2



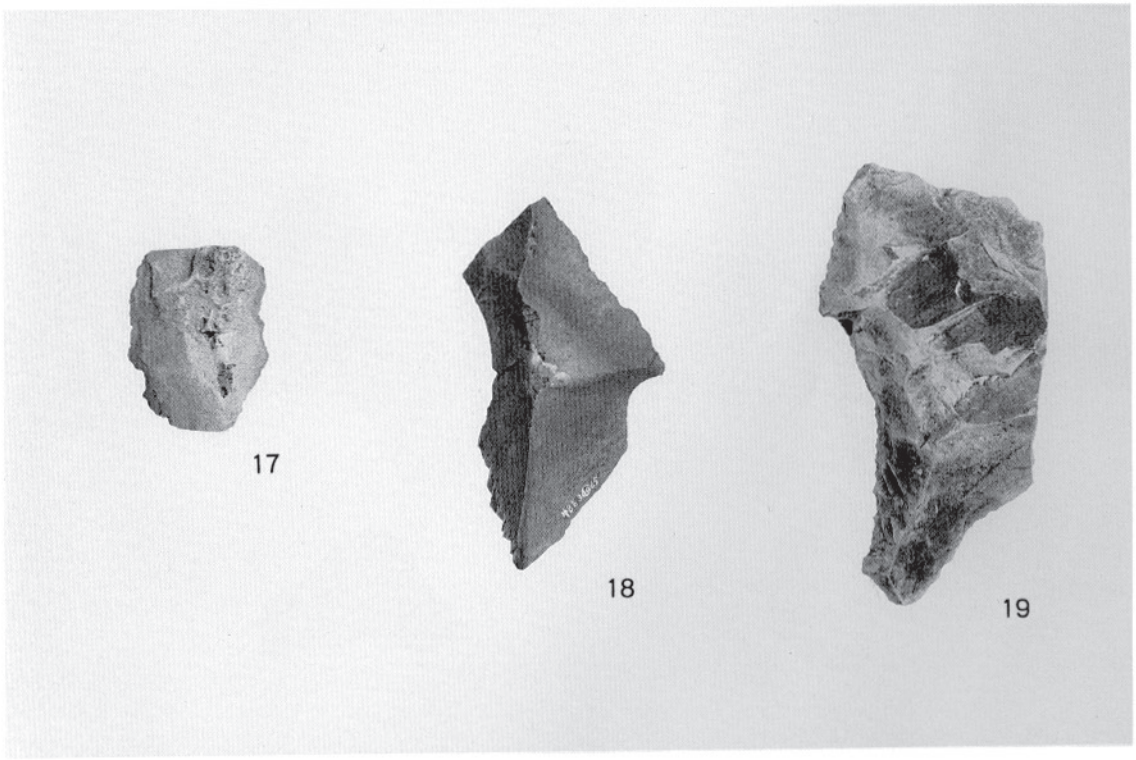
1. 石　槍 S＝約1／2



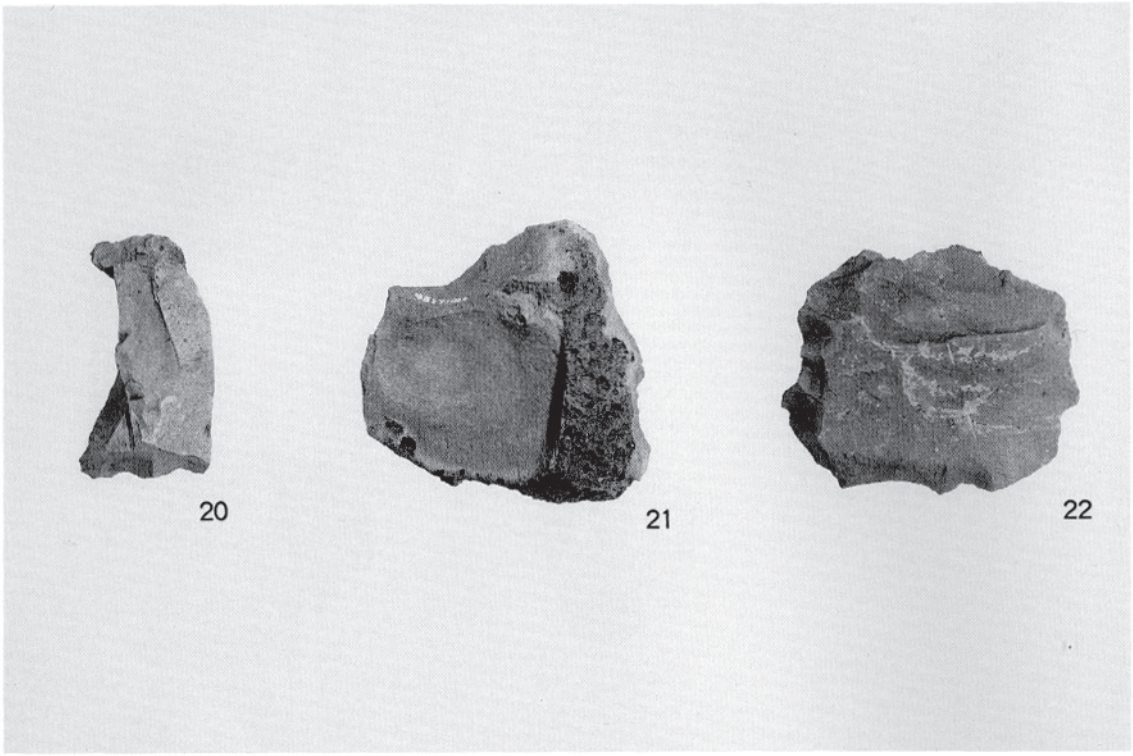
2. 磨製石斧　ピエス・エスキーユ　擦痕のある剝片 S＝約1／2



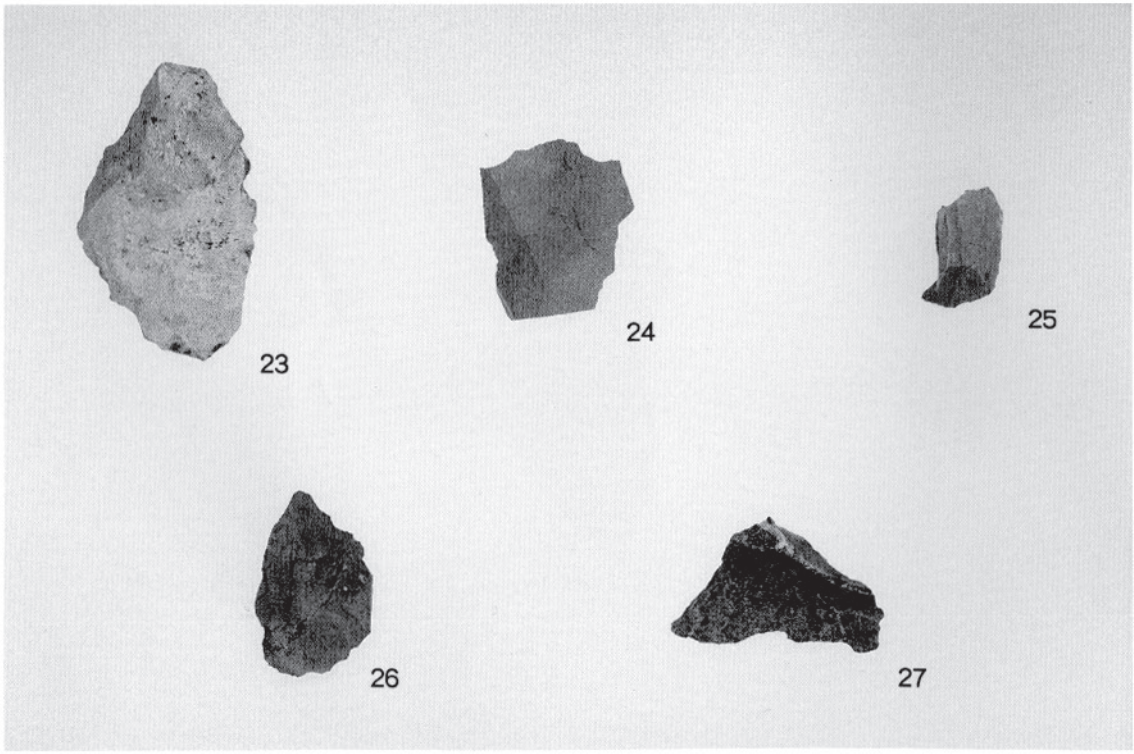
1. 不定形剝片石器A類 S＝約1／2



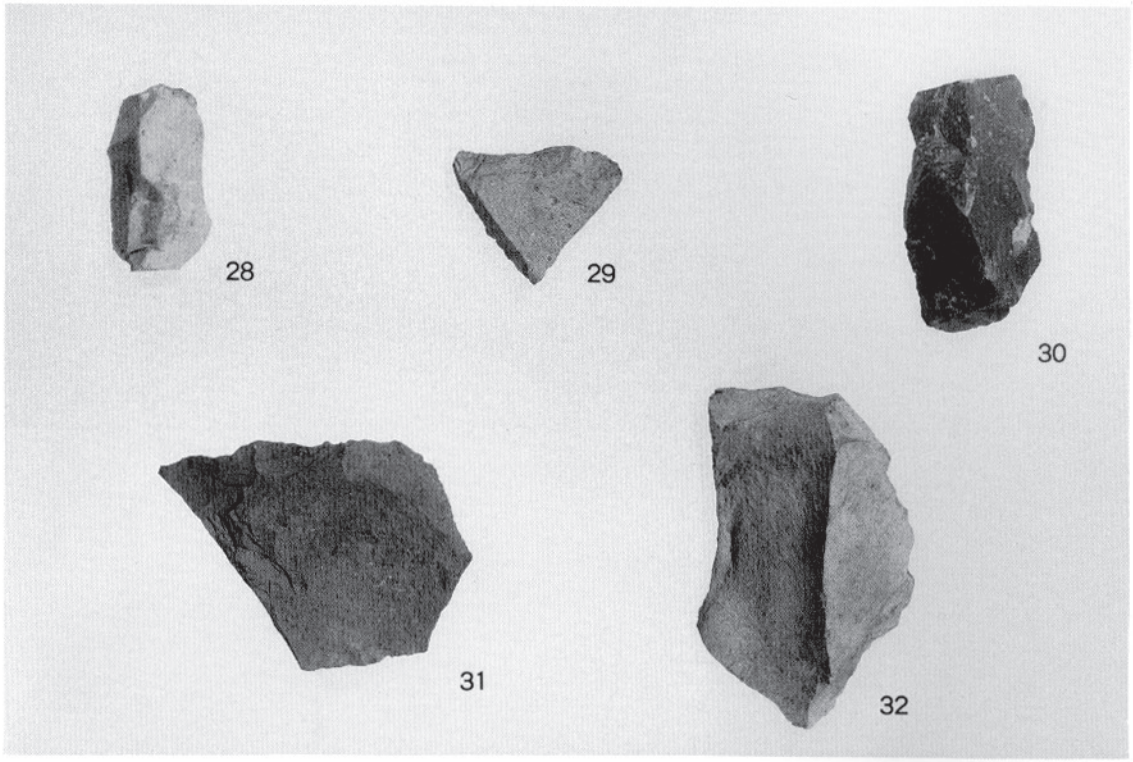
2. 不定形剝片石器B類 S＝約1／2



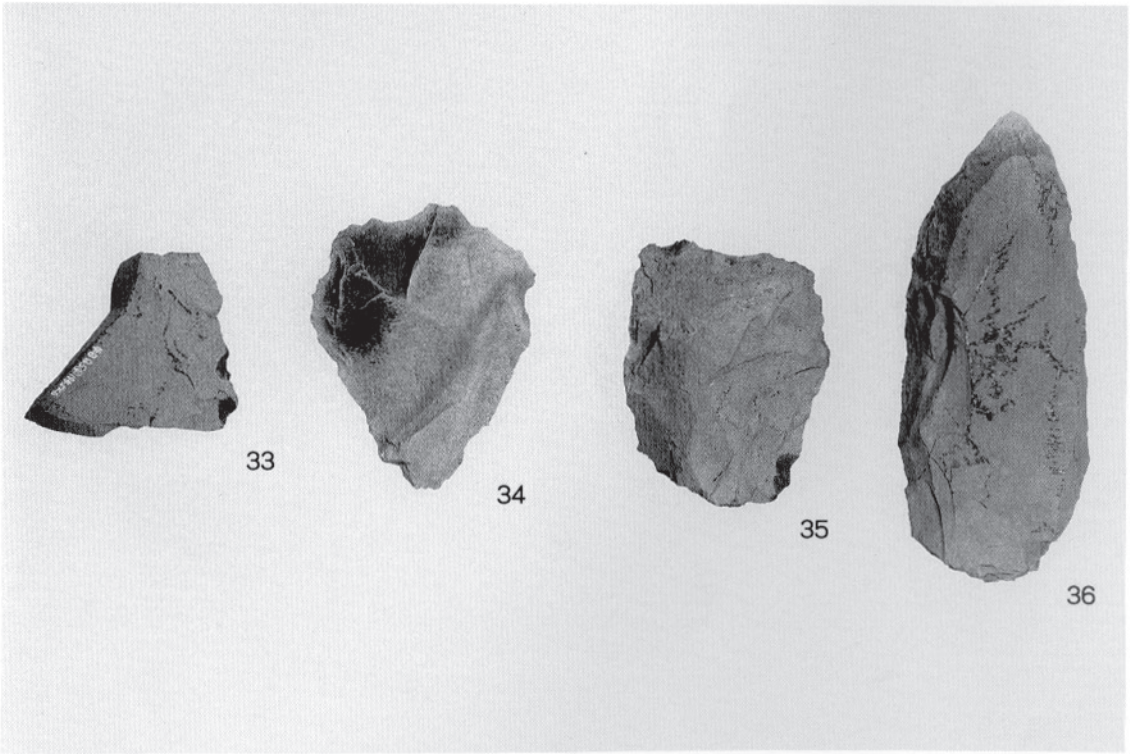
1. 不定形剝片石器C類 S＝約1／2



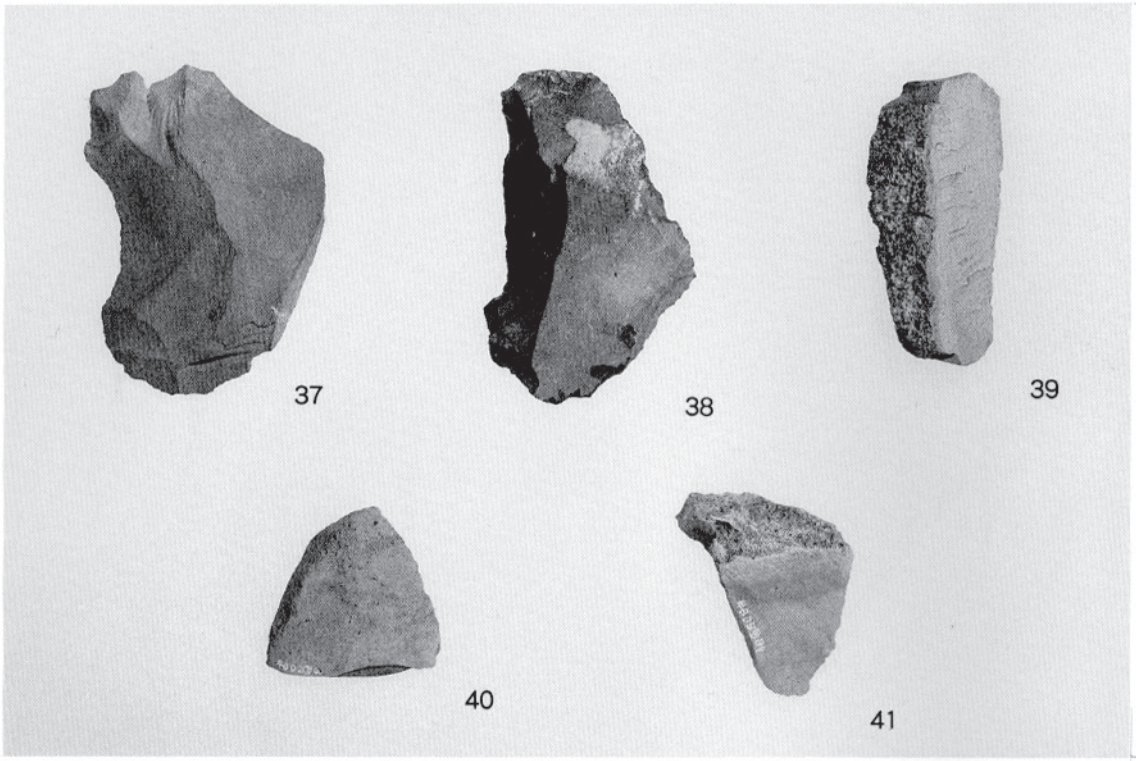
2. 不定形剝片石器D類 S＝約1／2



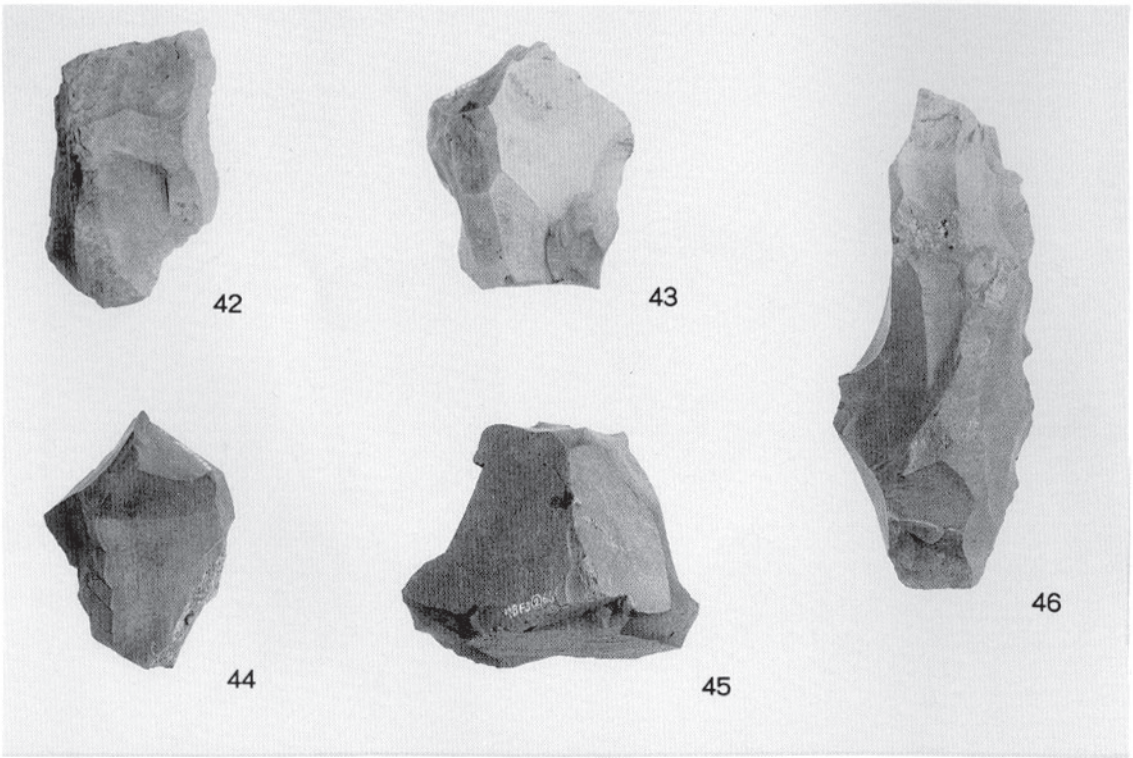
1. 不定形剥片石器E類 S＝約1／2



2. 不定形剥片石器F類 S＝約1／2

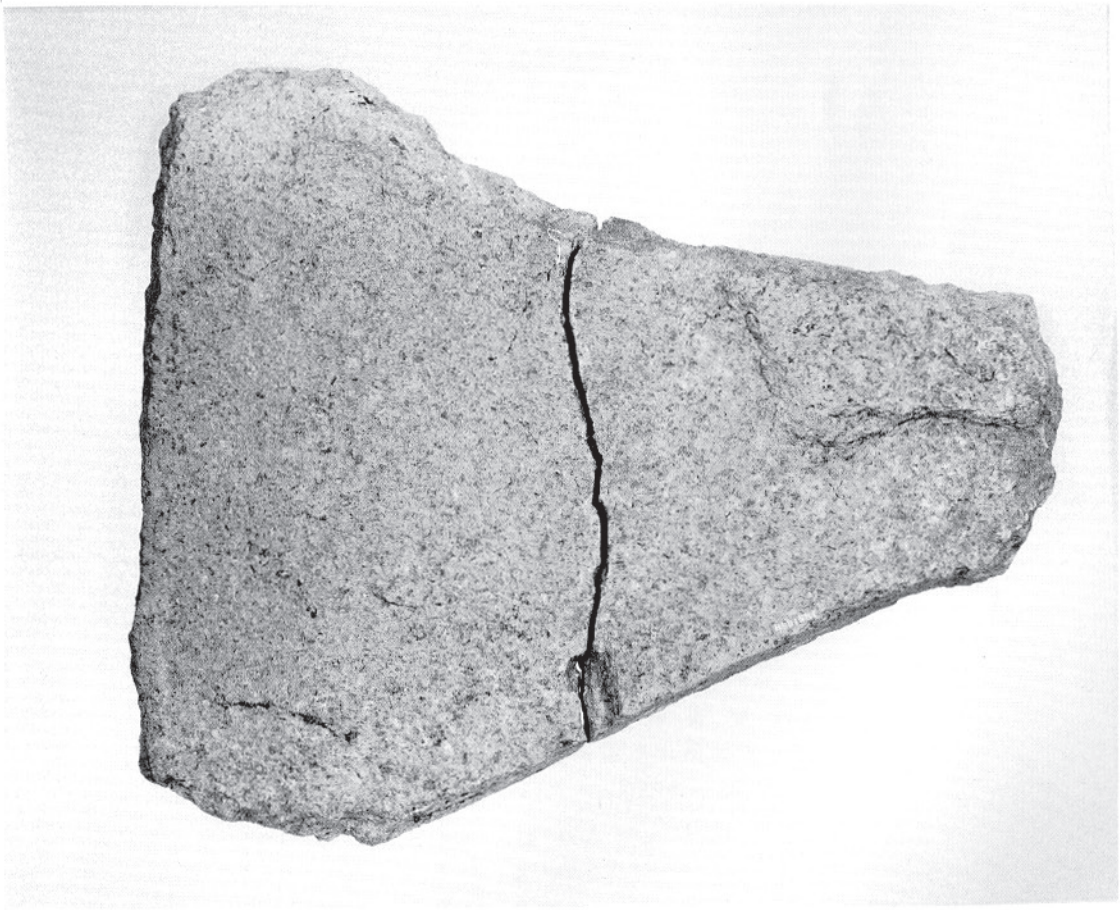


1. 不定形剝片石器G類 S＝約1／2



2. 石　　核 S＝約1／2

1. 面　付　石 S＝約1／4



2. 盤　状　石（SK1）　S＝約1／3

発掘調査参加者

発行日　平成5年3月31日

加茂市文化財調査報告（4）

牛ケ沢B遺跡発掘調査報告書

発行者　加茂市教育委員会
新潟県加茂市松坂町1－3
TEL　0256－52－0080

印刷所　株式会社小野塚印刷所
新潟県加茂市新町1丁目5番16号
TEL　0256－52－0056